

第三十七條 其他火工銃工等ノ生徒ハ拾七歳以上ハ奉命ノ日ヨリ十七歳以下ハ滿十七歳ニ至リシヨリ停年恩給ヲ受ルノ例ニ算入スルヲ得

第三十八條 若シ國民軍ヲ現役ニ徵發スルコト有テ既ニ恩給ヲ受テ退職シタル軍人再ヒ國民軍現役ニ就ク時其恩給ハ其現役ノ給料ト共ニ之ヲ受ルコトヲ得ヘシ然レモ前後ノ服役實期ヲ通算シテ其恩給ヲ増加スルヲ得ス但シ從軍傷痍疾病ノ事アレハ其時ノ殊典ニ從フ  
第三十九條 其上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役實期未タ二十年ニ滿タサル前免官セラレ後再ヒ現役ニ復シタル者ハ免官以前ノ服役時日ヲ恩給ノ期限内ニ算入スルヲ得但シ中間々斷ノ時日ハ之ヲ除クヘシ〔非職ハ其非職中ノ年數モ合算ス〕

其官階前後同等ナル時ハ直チニ其官階ニ屬スル恩給ニ從フ然レモ復役ノ時ノ官階前時ヨリ降ル時ハ退職ノ月其官階ニ屬スル恩給ノ外ヲ望ムノ權ナシトス

第四十條 逃亡以前ノ服役モ亦其以後ノ服役ト通算スルコトヲ得ヘシ然レモ後ノ服役ハ處刑後復隊ノ日ヨリ起算ス

第四十一條 凡ソ軍人服役中懲罰五日以上ニ上ル者ハ除テ算セス其餘算ノ法七日マテハ一ヶ月ヲ除キ二十七日ハ二ヶ月ヲ除キ三十七日ハ三ヶ月ヲ除キ四十七日ヨリ三ヶ月迄ハ半年ヲ除キ三ヶ月以上六ヶ月十五日迄ハ一年ヲ除キ餘ハ其實期ヲ算シテ之ヲ除ク  
例ハハ六ヶ月十一日ヲ除キ六ヶ月二十日ハ一年トシテ算入スル

從軍年ノ算則

第四十二條 軍人停年恩給ヲ受クヘキ服役期限ニ達スル者ハ其年限ノ中ニ從軍年ヲ算入スルヲ許ス其法左ノ如シ

第四十三條 其實期ノ中ニ從軍年ヲ二倍シテ算入スルハ  
戰時日本外ノ戰地服役

第四十四條 其實期ノ中ニ從軍年ヲ算入スルハ

第一 内地戰時ノ定ニテ戰團ニ因テ世ノ靜謐ヲ復スルニ與カリテカアル時

第二 戰時平時ヲ論セス日本外ノ地ニ於テ鎮戍シタル軍隊ニ在ル時

第三 海戰ノ時ニ當リ其船中ニ在ル時

第四 平時新嘉坡ヨリ西へ聖佛郎士西哥ヨリ東へ差遣シテ服役セシメタル軍人

第五 北海道ノ衛戍其他該地ニ半年以上札駐スル兵役ニ服シタル軍人

第四十五條 實期ノ中半數トシテ之ヲ算入スルハ  
海戰ノ時ニ當リ海岸防禦ノ服役

第四十六條 戰時虜獲ニ逢ヒ外國へ俘囚トナリタル時日ハ猶現役ニ在ルカ如ク之ヲ算ス

第四十七條 凡ソ恩典トシテ從軍年ヲ算スルノ法ハ其期十二ヶ月ニ足ラサル者ト雖モ之ヲ滿一年トシテ算ス然レモ十二ヶ月間假令ヒ數回ノ軍役ニ從フト雖モ之ヲ二年以上トシテ



算スルコトヲ許サス

其一期一年以上ニ跨カリ十二ヶ月ニ餘ル所ノ分數ハ之ヲ全一年トシテ算スルコトヲ得

第四十八條 從軍年ヲ算入シ及ヒ刑罰ニ因テ除キタル年月ヲ折算シテ其計算ヲ進達書ノ裏面ニ記載スヘシ

第四十九條 凡ソ傷痕疾病ニ由テ退職恩給ヲ願ハント欲スル者ハ其服役ヲ離ル、前ニ之ヲ願フヘシ

第五十條 如此キ軍人ハ傷痕疾病ノ原因ニ依リ合格ノ年齢ノ前ニ恩給ヲ得ント欲スルヲ以テ其傷痕疾病ノ原因症候トモ極メテ曲節ヲ悉シ之ヲ陳述スルコト必要ナリ

第五十一條 其傷痕疾病ヲ受ケシ事故並ニ原因ハ之ヲ証明スヘキ公ケノ報告若クハ他ノ公文ニ係ル書類ヲ証據トナシ疾病ヲ受ケシ時刻並ニ其時ノ景況ハ陸軍官憲ノ(戰地ノ司令官分遣隊ヲ司令スル下士大隊長幕員士官等ニテ二人若クハ三人ノ証人ノ前ニテ認メタル)証書ヲ據証トシ又其官憲ヨリ發シタル報告若クハ査問會議ノ書ヲ據証トナスヘシ

右ノ據証ニ供スル書中ニハ其傷痕ノ性質及ヒ之ヲ受ケタル時刻之ヲ受ケタル地所並ニ戰爭間ニテモ公務上ニテモ之ヲ受ケタル時ノ景況ヲ特別ニ奉章シ又凡テ醫家ノ診斷ニテ不治トナス者ハ悉ク之ヲ記載スヘシ

第五十二條 其傷痕疾病ノ不治タルコトハ陸軍病院ノ病院長若クハ最後ノ治療ヲ施シタル

傷痕疾病ノ類  
申ニ出テ別段  
ノ處ニ

市井病院ノ醫長ヨリ特別ノ証書ヲ以テ之ヲ確証スル者ニシテ此証書中ニ傷痕疾病ノ原因症候是ニ施シタル醫療ノ方法ヲ述ヘ以テ其不治タルコトヲ明カニ申述スヘシ  
其軍人右ノ病院ニ就テ治療ヲ受ケサル者ニハ陸軍病院若クハ市井病院ノ醫長診察ノ上ニテ証書ヲ授クヘシ

第五十三條 退職ノ願書ハ其軍人ノ屬スル隊ノ會計會議若クハ鎮臺司令將官ヨリ指定シタル隊ノ會計會議ヨリ其保證書類ト共ニ司契ニ送付ス司契此書類凡テ例規ニ合ヒタルモノト認ルルハ之ニ捺印署名シ之ヲ鎮臺司令將官ニ呈ス是ニ於テ司令將官ヨリ軍醫正二員並ニ初メ証書ヲ認メタル者ノ外其隊ニ屬スルト他隊ニ屬スルトニ論ナク軍醫若クハ軍醫副補ノ内二人ヲ命シ之ヲ検査セシム

第五十四條 其命セラレタル所ノ軍醫ハ司契並ニ其隊ノ會計會議員ノ前ニテ検査ヲナシテ後検査口供ヲ作ルヘシ而シテ此時兩軍醫ノ診斷否ナル時ハ其恩給願ハ他日ニ延ハシ司契ハ兩軍醫ノ口供書ヲ取り之ヲ記室ニ納ムヘシ總テ檢閱使又ハ平常ニテハ鎮臺司令將官ハ如此キ場合ニ於テハ其兩軍醫ヲシテ手術ヲ行ハシムルヲ得

第五十五條 其兩軍醫ノ検査ニテ當該軍人退職恩給ヲ受クルノ權アリト認ムル時ハ兩軍醫更メテ診斷書ヲ作ルヘシ此証書ハ別ニ一通ノ寫ヲ作り先ノ口供書ニ綴リ込ミ一包トナシテ檢閱使又ハ檢閱ヲナス司令將官ニ呈スヘシ



第五十六條 檢閱使又ハ檢閱ヲナス司令將官ハ此書類並ニ檢査口供書ヲ一覽シタル後先キニ命シタル二頁ノ軍醫正ヲシテ其面前ニテ查覈ヲナサシムヘシ  
而シテ司契ハ此查覈ヲ助ケ此查覈ニ就テ再ヒ口供書ヲ作り而シテ二頁ノ軍醫正ハ新ニ証書ヲ作テ其口供書ニ綴リ込マシムヘシ

第五十七條 此查覈ヲ經テ願意本ツク所アリト認メタル時ハ檢閱使又ハ檢閱ヲナス司令將官之ヲ會計會議ニ下シ退職恩給許可ヲ請フノ進達帖ヲ作ラシメ而シテ監督查照ヲ遂ケ將官可トスルノ後其帖ト諸書類並ニ其願書ニ就テ自己ノ意見ヲ記シタルト併セテ其包内ニ入レ之ヲ陸軍卿ニ呈ス

第五十八條 其軍人屬スル所ノ隊ヨリ離レテ遠方ニ在ル者ハ鎮臺ノ司令將官ノ命ニテ其近隣ノ隊ニテ其願書ノ扱ヒヲナサシムヘシ

第五十九條 恩給ノ願文ハ一次ニ服役停年ト傷痍疾病トヲ主意トシテ之ヲ認ムルコトヲ得ス其軍人停年ノ恩給ヲ受ル權利ヲ有シ同時ニ傷痍疾病ノ恩給ヲ願ハント欲スル者ニハ先ツ其願文何レノ式ヲ用エヘキヤヲ問ヒ而シテ自ラ撰フ所ニ應スヘシ

第六十條 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ服役實期十五年以上ニ至リ病氣ニテ三年來非職ニ在リ現役ニ復ス可カラサルカ爲ニ退職ヲ許サル者ハ初メニ查問會議ニ於テ之ヲ檢査シ會議ノ商評之ヲ應當ナリト決マル時ハ直チニ退職ノ進達帖ヲ

服役ニ在ラサル軍人特別ノ處置

作ラシム此進達帖會議ノ口供書ト共ニ陸軍卿ニ送スル時ハ卿之ヲ處分シ該官ヲシテ退職ニ因テ罷役後恩給ヲ受ルコトヲ得セシム

第六十一條 停年ニ就テ恩給ヲ仰クノ權アル軍人當時事故アリテ服役ヨリ引去リタル者ハ其願書ヲ要用ノ書類(服役ノ明細書並ニ身元履歷書)ト共ニ取揃ヘテ其軍管ノ鎮臺ノ司契課ニ致スヘシ司契課ニテ之ヲ檢査シ書類ニ檢印署名シ之ヲ鎮臺ノ司令將官ニ呈スヘシ

第六十二條 其軍人傷痍疾病ノ爲ニ増給ヲ請フ者ハ左ノ方法ニ從フヘシ  
若シ其傷痍疾病ニ因テ既ニ恩給ヲ受ルノ後引續キ重症ニ趨キ一肢ヲ失フニ至ラシメタル時ハ當該軍人其恩給ニ就テ更ニ増算スルコトヲ得ヘシ

又第一號休暇ヲ得テ罷役ニ入りタル後其傷痍疾病以來引續キ重症ニ至リタル軍人上下同一ノ事情アルニ臨ンテハ恩給ヲ仰クコトヲ得ヘシ但シ前ノ第九條ニ揭示スル所ノ症候アル者ニ限ルヘシ

凡テ如此キ軍人ノ情願ハ其現役ヲ離レシヨリ算シテ一年內ナレハ之ヲ達スルコトヲ得ヘシ然レモ其傷痍疾病一肢ノ切斷ヲ促シ或ハ兩眼ヲ盲スルニ至リタル者ニハ延ヒテ三ケ年內ニ至ルヘシ

第六十三條 其願書ハ鎮臺ノ司契課ヘ致シ其保證ノ書類ヲ副フヘシ其書類ハ  
第一 當該軍人服役ヲ離レシ時其傷痍疾病ハ例規ニ準シ查覈ヲ受ケタルヲ証スル諸公文



第二 現役ヲ退キタルヲ証スル休暇免狀並ニ諸公文

第三 軍醫ノ診察口供書並ニ診斷証書 是ハ軍人市井ノ籍ニ復セシ以來其療用ヲ受ケタル軍醫ヨリ其傷痍疾病引續キ重症ニ變シタルヲ以テ退職恩給若クハ計算増加ヲ願フニ至ルヲ証スル者

但シ軍醫ナキ地方ニ於テハ市井ノ醫員執ヒ一人外二人ニテ診斷シ府縣廳ノ役員立合ノ上証書ヲ認メ役員與印シテ所管鎮臺ノ司契課ニ致スヘシ

第六十四條 司契課ニテ之ヲ受ケタル時其日附ヲ檢シ期限内ニ在レハ鎮臺ノ司令將官ニ呈シ將官一覽ノ後再ヒ司契課ニ下シ前時ノ書類ト照査シ前時ノ軍醫正ヲシテ其口供書ニ就テ之ヲ檢實セシメ非違ナキ時ハ將官ヨリ前時ノ隊若クハ近傍ノ會計會議ニ下シテ第二十四條並ニ第四十九條以下ノ例ニ從ハシム

司契課ニテ之ヲ受ケタル時其日附ヲ檢シ若期限外ニ在レハ之ヲ還付ス然レモ司契故ナク之ヲ收受セサル時ハ當該ノ軍人直チニ司令將官ニ歎訴スルヲ得

第六十五條 寡婦扶助料其夫ノ傷痍ニ基ツク者ハ其傷痍ヲ受ケタル事故ト傷痍ノ質トノ照査ニ供スヘキモノアルヲ主トスルヲ前條軍人ノ傷痍ニ就テ揭示スル所ノ如シ而シテ之ヲ証スル者ハ軍醫若クハ市井醫員ノ公文証書ニシテ其文中ニ當該ノ患者竟ニ其傷痍ニ由テ死ニ至リシヲ陳述スヘシ

寡婦孤兒ニ就テ特別ノ處置

若其死没一旦傷痍平復ノ後ナルモ其寡婦第十三條第三款ニ揭示スル處置ヲ仰クコトヲ得ス故ニ其死去戰地ノ事故ニ源因スル時ハ其証據ニ供スヘキ公ケノ報告若クハ其事故ヲ確証スル公文若クハ陸軍官憲ノ証書若クハ其官憲ノ報告或ハ査問會議ノ書類等ノ内其一ヲ以テ保証ニ供シ且上ニ擧ケタル醫員ノ証書ニテ其事故直チニ當該軍人死没ノ源因タルヲ明証スヘシ

此兩証ヲ有スレハ其寡婦其夫ノ死去ノ日其住スル區ノ戸長ニ報スル死去ノ証書中ノ日附ヨリ六ヶ月以内ニ其願書ヲ呈スルヲ許ス

第六十六條 其死没ノ源因疫癘傳染ニ係ル者ハ其証據ニ供ス可キ者左ノ如シ

第一 府縣若クハ陸軍官憲ノ証書 是ハ其軍人死去ノ節其死去セシ地方ニ於テ其疫疾流行セシコトヲ証スル者

第二 陸軍官憲ノ証書 是ハ當該軍人ノ死没其服役中ニ在テ疫疾ニ罹リタルヲ証スル者

第三 醫員合式ノ証書 是ハ當該軍人死去セシ病院ノ院長軍醫若クハ此患者ノ執ヒタリシ陸軍若クハ市井ノ醫員ノ診斷書ナリ若シ軍醫ノ診斷書ヲ得ヘカラサル時ニハ其地方ノ府縣若クハ陸軍ノ官憲ヨリ遺ハシタル檢官ノ証書ヲ附スヘシ

第六十七條 疫癘傳染ニ由テ死没ニ至リシ軍人戰地若クハ公務ノ外ニ於テシ又戰地ニテ之ヲ受タルモ一旦平復ノ後ナルモハ此例ニ非ラス



顯出ノ地方

第六十八條 凡テ寡婦ヨリ出願スルニ就テ証據ニ供スヘキ件々ハ當該軍人ノ孤兒第十六條ノ例規ニ準シ其母ニ代ハル時モ亦異ナルコトナシ

第六十九條 寡婦孤兒扶助料ノ願書ハ居住地ノ府縣廳ヨリ外國ニ在ル者ハ外務省ヨリ北海道ニ在ル者ハ開拓使ヨリ内務省ニ移シ内務省ヨリ陸軍省ニ照會シ陸軍省ヨリ當該軍人本屬ノ鎮臺ニ下シ査覈ノ上再ヒ陸軍卿ニ呈シ卿之ヲ正院ニ移スコト第七十六條ノ如シ

第七十條 其願書ハ寡婦ノ扶助料ナレハ寡婦ノ主名ニテ親族若クハ其郷里ノ戸主三名証人ニ立チ連名タルヘシ孤兒ノ扶助料ナレハ後見人一名又ハ親族若クハ其郷里ノ戸主二名証人ニ立チ連名タルヘク而シテ區戸長之ニ與印スヘシ

第七十一條 寡婦扶助料夫ノ傷痕疾病ニ基ツク者ハ第六十五條若クハ第六十六條ノ証書ノ外夫ノ服役明細書婚姻屆書ト並ニ男女子アレハ其年齡書ヲ副フヘシ若シ男女子年齡書ニテ其配合ヨリ生レタルコトヲ証シ戸長ノ與印アレハ婚姻屆書ニ及ハス

第七十二條 停年恩給ニ基ツク寡婦ノ扶助料願書ニハ其夫ノ服役明細書男女子年齡書其夫ニ政府ヨリ給シタル恩給番號登錄寫帖即チ恩給証書ヲ副フヘシ

第七十三條 其遺孤母ナク直チニ父ノ傷痕疾病ニ基ツク恩給ヲ受ル者ハ婚姻屆書ヲ除キ母ノ死去若クハ離縁ヲ屆ケシ証ヲ出スノ外第七十一條ノ例ニ異ナルコトナシ其母死去ノ後恩給ヲ繼クノ孤兒ハ恩給番號登錄寫帖即チ恩給証書ヲ副フヘシ

退職恩給ノ計

第七十四條 下士兵卒並ニ同等ノ輩退職恩給ヲ獲ルノ權ヲ得タル者ハ其免役ノ時ニ當リ其恩給許可ノ命下ルマテ其隊ニ駐マルヘシ然レモ直チニ歸郷ヲ願フ者ハ亦自在ナルヘシ但シ其歸郷ヲ願フ者ハ發程ノ日ヨリ除隊スヘシ

右ノ除隊ニ屬シタル者ハ發程ノ日ヨリ陸軍定額内ヨリハ旅費ノ外一切之ヲ給スルコトナシ

其傷痕疾病ニ基ツキ退職ヲ許ス者ハ其所屬ノ隊ニ止マリ計算進達ノ日ヲ待ツヘシ

第七十五條 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役停年ニ由テ退職ヲ願ヒタル者ハ其進達帖陸軍卿ノ受領ヲ歴タルノ報ヲ得ルノ後ニアラサレハ其所屬ノ隊ヲ離ルハコトヲ得ス然レモ其情願ナレハ檢閱使直チニ休給ノ半額ヲ給シテ之ニ六ヶ月ノ休暇ヲ給フコトヲ得而シテ已ムヲ得サルノ事故アリテ其鎮臺ノ司令將官並ニ其隊ノ首長之ヲ保証スルモ更ニ休暇ノ願ヲ許シ猶六ヶ月ノ休暇ヲ給フヲ得ヘシ但シ休暇間ノ月日ハ計算ノ時之ヲ除ク

第七十六條 凡ソ計算ハ陸軍卿之ヲ主任シ合式ノ恩給計算書ヲ作り之ヲ正院ニ移ス其傷痕疾病ノ恩給ニ係ル者ハ豫メ其証憑書類ト共ニ陸軍々醫總監ノ會議ニ付シ而シテ後ニ之ヲ計算ス

正院ニテハ計算書ヲ大藏卿ニ移シ點檢ヲ歷テ再ヒ正院ニ移シ正院ヨリ恩給許可ノ令ヲ内

圖十三年第二十六號公達ヲ



以テ大藏卿ニ  
移シトアルヲ  
會計檢査ニ付  
スト改ム

務陸軍兩卿ニ移シ其所轄ヲ歴テ當該人名ニ下サシム

第七十七條 停年恩給ハ之ヲ受ル軍人ノ官階ニ準スルヲ例トス然レハ其官階ニ進ミ現役ニ復スル未タ進級條例ノ停年最下限ノ半ニ至ラサル前ニ退職ヲ願フ者ハ前官ニ準シテ之ヲ賜フヲ例トス

第七十八條 凡テ上長官士官准士官下士並ニ同等ノ諸官其官階ニテ現役ニ服スルコト十二年滿限(上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ非職ヲモ算ス)ノ者ニハ其官階ニ屬スル恩給五分ノ一ヲ以テ之ヲ増スコトヲ得

此特別ノ例ニ係ル恩典ハ或ハ停年ニ由リ或ハ傷疾疾病ニ由リテ表中最上限ノ權ヲ有スル者モ亦是ニ與カルコトヲ得

第七十九條 恩給計算ヲナスニ當リ其軍人前官ニテハ十二年滿限ニ當リ五分一ノ増加ヲ得ルヲ以テ其増加ノ額現在ノ官階ニテ算スルヨリモ較上ル者ハ前官ニ準シテ之ヲ算スルコトヲ得

第八十條 毎年政府會計ノ期ニ於テ從來各種ノ恩給ニ就テ其年ノ通計ヲ以テ來年ノ多寡ヲ量リ大藏卿ヨリ正院ニ上申シ決議ノ上太政大臣ヨリ大藏陸軍兩卿ニ之ヲ下付ス

第八十一條 凡ソ恩給扶助料受領ノ者ハ内務省ヨリ其居住地ノ府縣廳ヲ歴テ其恩給登錄寫帖即チ恩給証書ヲ受領シ是ニ據テ年々府縣廳ヨリ金圓支給ヲ仰クヲ得

罷役後恩給

其當該人名恩給証書ヲ受領スルノ前ニ陸軍卿ヨリ計算ノ告示ヲ該名ニ下シ其中ニ計算ヲ立ル本則ト之ニ屬スル諸事ヲ告示ス

第八十二條 罷役後恩給ハ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩罷役ニ入ルノ初メ服役實期十五年滿限ノ者ニ非レハ之ヲ受クルコトヲ得ス

其給額ハ當該上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩官階ニ準スル恩給ノ最下限ノ給額三十分ノ一ヲ以テ服役實期ノ年數ニ乘シテ給ス但シ罷役後恩給ハ從軍年並ニ十二年停年ヲ算入スルノ恩典ナシ

第八十三條 罷役後恩給ハ當該軍人ノ生涯ニ止リ變シテ寡孤扶助料トナルコトナシ

第八十四條 軍人疾病不治ノ症ニ因テ罷役ヲ願フ者ハ其願書疾病ノ爲メノ退職願ノ如ク之ヲ扱フヘシ

其不治タルヲ証スル爲ニ診斷ヲナス醫官ハ鎮臺司令將官ヨリ之ヲ命ス

其診斷不治ト決スル者ハ會計會議ニ付シ爾後ハ第五十三條以下ノ諸條ニ開列スル所ノ方法ニ準スヘシ

第八十五條 其上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩軍紀ヲ犯シ懲治ノ爲ニ罷役ニ入ル者恩給ヲ賜フノ例ニ在ラス

第八十六條 恩給ヲ受クルノ始期ハ左ノ如シ

恩給ノ支給並ニ請求



第一 計算ノ告示ノ日ヨリ之ヲ給ス即チ陸軍ノ簿籍中該名ヲ除クノ日ナリ

第二 計算告示ノ日既ニ休暇ニ在ル上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ニハ許可ノ令下ル日ヨリ之ヲ給ス其隊ヨリ發程シタル何ノ日ニ在ルヲ論セス

若當該上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ニハ恩給ヲ受ルノ日ヲ限リ休暇俸ノ餘金ハ陸軍省ヘ返納ス

第三 下士以下モ亦前條ニ同シ其休暇俸ハ之ヲ願フノ權利ナシ

第四 當該軍人死去シタルハ家族扶助料ハ其死去ノ翌日ヨリ給ス

第八十七條 凡テ恩給並ニ扶助料ヲ受クルノ始期ハ陸軍省ヨリ内務省ヘ通報シ四季ノ首月毎ニ前三ヶ月分其府縣廳ヨリ金額ヲ支給ス

第八十八條 金額ヲ受領スル者ハ當該人名ニテモ代人ニテモ登錄寫帖ノ證書ヲ持參シ支給人披見ノ上其區戸長ヨリ出セル本人存生ノ證書並ニ金額受領證書ト引替ニテ之ヲ交付スヘシ但シ外國ニ在留セル其本人存生ノ證書ハ日本ノ公使若クハ領事官ヨリ差出スヘシ

第八十九條 若シ金額ヲ受ル當該人名前三ヶ月以來死去シタル時ハ支給人戸長ヨリ出セル死去ノ證書ニ對シ日割<sup>一ヶ月</sup><sub>十日</sub>トスヲ以テ其金額ヲ給シ受領證書ヲ取り其權利消絶ニ屬シテ移轉ナキ者ハ其登錄寫帖ノ證書ヲ收メ府縣廳ヨリ内務省ニ還付シ而シテ陸軍省ニ報告スヘシ

第九十條 其權利未タ消絶セシテ移轉ニ屬スル者ハ登錄寫帖ヲ還ヘシ其寡婦若クハ孤兒扶助料願出ノ証トナサシム

第九十一條 恩給番號登錄寫帖ノ證書ハ其裏面ニ四首月ノ金額ヲ記シタル者ナリ若恩給ヲ受ルノ人其證書ヲ盜難水火災等ニテ失亡スル時ハ速カニ届ケ出ヘシ然ル時ハ猶第二寫帖ヲ受ルコトヲ得ヘシト雖モ第二寫帖ヲモ失亡スル時ハ最早之ヲ受ルコトヲ得ス其恩給ハ唯生存ノ證書ノミニ就テ之ヲ給スヘシ

第九十二條 若陸軍恩給ヲ受ルノ人其本管即チ證書中記載ノ地ナラスニテ他府縣ニ就テ金額ヲ受領セント欲スル者ハ此事ニ就テ其府縣廳ヲ歴テ出願スヘシ

右願書ハ四首月ノ一日ヨリ二箇月前ニ出スヘシ此期限ヨリ遲延ニ及ヘハ從前ノ府縣廳ニ就テナラテハ之ヲ受領スルコトヲ得ス

第九十三條 日本外ノ地ニ寄留ノ許可ヲ願フハ地方官憲ノ手ヲ歴テ内務卿ニ願フヘシ其願意至當ナレハ内務卿ノ處決ニ因テ恩給若クハ扶助料一箇年分ノ前借ヲ許スヘシ

第九十四條 前四條ニ揭示セル所ニ拘ラス恩給並ニ年々ノ扶助料ハ一ヶ年ノ間棄置キ請求セサル時ハ大藏省ノ恩給簿ヨリ之ヲ削リ去リ再ヒ請求スト雖モ前時ノ金額ヲ得ルノ權利ナシ

又寡婦孤兒等當該軍人ノ死去ノ日ヨリ一箇年ノ間其事狀ヲ審カニシテ願出サル者ハ其權利



計算ノ請求

利消絶ニ屬ス

第九十五條 陸軍恩給ノ計算金額ニ就テ違算ノ虞アリト思フ時ハ初メテ金額ヲ受領セシ日ヨリ三ヶ月以内ニ之ヲ願出ルヲ得ヘシ但シ萬一粗漏ニ屬スル時ハ其權利消絶スヘシ  
右ノ請求ハ地方所管領臺司契課ノ手ヲ歴テ陸軍卿ニ願フヘシ

第九十六條 凡ソ恩給ヲ仰ク者故ヲ二年月ヲ算スルコト實ナラス或ハ傷痍疾病ニ托シ或ハ寡孤ナリト偽ハル等上告實ヲ以テセサル者ハ國成典アリ其發覺該官致仕ノ前ニ在レハ軍法ニ處シ致仕ノ後ニ在リ若クハ其他ノ者ニ係レハ常律ニ處スヘシ

陸軍罷役俸並恤金令

第一條 凡ソ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役期年滿十一年ノ者ニ非レハ罷役ニ就クト雖モ絶テ俸給ヲ得ルノ權ナシ

第二條 凡ソ罷役ニ入ル上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役期年滿十一年ニ至リ未タ十五年滿限ニ至ラサル者ハ其就役年間ノ半ニ均シキ年間罷役俸ヲ受ルヲ得此罷役俸ハ其官階ニ準スル退職恩給ノ最下限三分ノ二ニ均シトス

第三條 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩罷役俸ヲ受ルノ權利ハ陸軍卿ノ確定セル計算ニ基ツキ正院ニテ之ヲ覆勘ス其方法凡テ退職恩給ノ例ノ如シ

第四條 計算ノ本則ハ亦陸軍卿ヨリ公券ヲ以テ當該ノ人名ニ知告シ其服役實期ノ委曲並罷

罷役俸

役俸ヲ受ル權利ヲ有スルノ月ヲ開示ス此公券ハ支給許可ノ證書ト共ニ當該軍人ノ居住スル地方所管領臺ノ司契課ニ下シ司契課ノ官人署名捺印ノ上ニテ府縣駐在曹長ヲ媒シ當該軍人ニ下附ス

第五條 計算請求ノ權並ニ權利停止ノ項ハ恩給令ノ第九十四條並ニ第四條ニ異ナルコトナシ

第六條 罷役俸ノ支給ハ四首月ニ於テ前三ヶ月分該管領臺ノ司契課ヨリ府縣駐在曹長ヘ移シ當該人名ニ交付シ受領證書ヲ出サシム其受領證書ニハ生存ヲ証スル爲ニ戸長ノ與印ヲ受テ出サシム

第七條 凡ソ罷役俸ヲ受ルモノハ府縣駐在曹長ノ請ニ應シ其度毎ニ公券ヲ出シ示スヘシ

第八條 若當該ノ軍人先規内ニ死去シタル時ハ駐在曹長ニテ其金圓ヲ交付セス死去ノ月日ヲ審カニシ領臺司契課ニ報シ日數ニ準シ殘餘ノ金圓ヲ受テ之ヲ當該軍人ノ嗣子若クハ親族ニ交付シ其公券ヲ取テ司契課ニ還付スヘシ

總テ此手數ヲ省ク爲ニ罷役俸ヲ受ルノ軍人死去ノ度毎ニ月日ヲ審カニシ府縣駐在曹長ヲ媒シ當該ノ司契課ニ報告スルヲ要ス

其定期盡ル者ハ最後ノ金額ヲ交受スル時公券ヲ還付シテ皆濟ヲ証スヘシ

第九條 罷役俸ヲ受クルノ軍人居住ヲ移シ他ノ管廳ニテ兌換票ヲ交授セント欲セハ其旨ヲ



以テ四首月一日ヨリ二ケ月前ニ當該ノ司契課ニ願書ヲ呈スヘシ但シ移住地並ニ其移住ノ月日ヲ審ニスヘシ

第十條 罷役俸ハ一週年棄置キ請求セサル時ハ之ヲ其權利消絶セシモノトシテ司契課ノ簿籍ヨリ其名ヲ除ク

罷役恤金

第十一條 凡ソ下士兵卒並ニ同等ノ輩陸軍ニ奉仕シ疾病ヲ受ケ若クハ公務中傷病ヲ受ケテ罷役ニ入り傷病疾病ヲ受ケタル故ヲ以テ扶助ヲ仰グヲ要スル者服役實期滿九年ノ後ナレハ罷役恤金ト名ケタル恩典ニ與カルコトヲ得此恤金ハ二季ニ分テ月頭ニ支給スルモノナリ

第十二條 下士兵卒並同等ノ輩服役中受ケタル傷病疾病ニ由テ第一號ノ休暇ヲ與ヘ罷役ニ入リタル者ハ此給料ヲ願フコトヲ得

第十三條 此恤金ヲ受ル者ハ他ノ職役ニ就クカ又ハ他ノ營業ヲ爲スカ或ハ本人不行跡若クハ粗暴ノ失錯アレハ陸軍卿此恤金ヲ停止スルコトヲ得

此故ニ鎮臺ノ將官ハ府縣ノ官憲ニ依頼シ時々報告ヲ取り之ヲ陸軍卿ニ呈ス

第十四條 此恤金ハ其實一身ノ口ヲ糊スルヲ目的トスルヲ以テ若當該ノ罷役軍人死シテ之ヲ埋葬スルニ其家費ヲ盡スノ急乏ニ逢ヘハ陸軍官憲ノ願ニ依テ陸軍卿其家族ニ一期六ケ月分ノ金額ヲ給與スルコトヲ得

第十五條 總テ軍人罷役ニ入り又ハ唯服役ヲ免シタル者ハ登時之ヲ願フノ志趣ナシト雖後日若シ此恩典ヲ願ハント欲スル者ノ爲ニ一箇年ノ猶豫ヲ假ス其一旦此恩典ヲ受ケタル後

再ヒ之ヲ願ハント欲スル者モ同シク此猶豫ヲ假スヘシ

第十六條 此恩典ヲ請フノ進達書ハ其人ニ就テ其隊ノ長官之ヲ作り其内ニ必ス當該軍人退居セント欲スル地名ヲ開列スヘシ而シテ之ニ副フヘキ書類左ノ如シ

第一 軍醫診斷証書 是第一診斷並ニ覆覈診斷ヲ兼ル者ニシテ其傷病疾病ノ罷役ニ至ラシメタル景況ヲ精確仔細ニ記述スル者ナリ

第二 其傷病疾病ノ原因証書 是病因ヲ詳カニスル者ニシテ若其病因明確ニ証スヘカラサル時ハ其軍人發病ノ時ノ景況ヲ叙シ病症ニ就テ臆斷ノ原因ヲ書スヘシ

第三 其軍人ノ服役並人相ノ記載書並ニ身元明細書ヲ添フヘシ

第十七條 當該軍人ハ該隊中ニ在テ進達ニ就テノ處決ノ來ルヲ待ツヘシ但シ直チニ歸郷ヲ願フ者ハ其意ニ任ス

第十八條 其隊ノ長官ハ之ヲ鎮臺ノ司令將官ニ呈シ司令將官ハ之ヲ陸軍卿ニ移シ卿又之ヲ陸軍々醫總監ノ會議ニ付シテ其覆檢ヲ歷ルノ後陸軍卿其年々ノ金額ト之ヲ受ルノ始期トヲ定ム

第十九條 凡此恩典ヲ受タル軍人ハ其姓名ヲ書シタル券狀ヲ受ク是ハ唯二ケ年間ノ價直ヲ

許可ノ法式



請願ノ處置

有スル者ニシテ之ニ陸軍省ニ在ル恩金本帳ニ登録シタル番號ヲ附ス

第二十條 其軍人此券狀ヲ受ケテ罷役ニ入リタルキハ直チニ軍隊ノ簿籍ヨリ其名ヲ除キ其居住ノ地ヘ向ケ發程セシム其郷里ニ至ルニ及ヒ自ラ此券狀ト並ニ罷役休暇ヲ受ケタルヲ其管廳並區戸長ニ報スヘシ

第廿一條 恩給受領ノ始期ハ其券狀ヲ受ケタル日ヨリ始ムルヲ例トス然レモ其隊中若クハ陸軍病院ニ在テ發程遅延ニ及ヒタル日數ハ之ヲ申告シテ陸軍卿ノ處決ニ任スヘシ

第廿二條 其支給受領証書ノ方法ハ第六條以下ニ揭示シタル罷役給ニ異ナルコトナシ唯當該軍人死去シタルキハ券狀ヲ府縣駐在曹長ニ還付スルノ外計算還納ヲ要スルコトナシ

第廿三條 其居住ヲ移ス者ハ亦第九條ノ方法ニ準ス若其手續ヲ歴スシテ移住スル者ニハ再ヒ給與スルコトナシ

第廿四條 二箇年恩金ヲ受ケタル後ハ再ヒ後二ケ年ノ恩金ヲ給セス然レモ之カ爲ニ例年春秋兩度其管ノ領臺ヨリ特別ノ委員ヲ派出シテ當該ノ軍人ヲ覆檢セシムルヲ以テ此委員猶本人ノ本復ニ至ラサルヲ証明スル時ハ更ニ二年ノ恩金券狀ヲ受クルコトヲ得

第廿五條 右委員巡廻ノ節其診斷ヲ受ケサル者ハ恩金ヲ停止スヘシ

此委員診斷ノ節本復ニ趣クヲ以テ一旦券狀ヲ繳納スト雖モ其後疾病再發スルキハ更ニ之ヲ願フコトヲ得ヘシ

病廢疾人ニ就テ特別ノ處置

其再發委員巡廻ノ前ナルキハ巡廻ヲ待テ之ヲ願ヒ若其期遠キハ府縣駐在曹長ニ就テ其查察ヲ受テ之ヲ願ヒ猶事宜ヲ得サル者ハ管廳ノ証書醫員ノ証書ヲ以テ之ヲ願フヘシ

第廿六條 當該ノ軍人其傷疾疾病重症ニ趣キ恩給ヲ給スヘキニ係ル者ハ更メテ恩給ヲ賜フ罷役恩金ノ券狀ニテ受領シタル金額ハ恩給受領ノ日ヨリ返納スヘシ

第廿七條 凡テ軍人服役中ノ疾病(公務ノ故ニ非ルモノ)ニ由テ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若クハ兩目ヲ盲スト雖モ恩給ヲ受ルノ權利ナキ者ハ服役實期滿九年ニ至ラスト雖モ四季ノ扶助金ヲ給スルコトアリ

其願書進達ハ上ニ揭示スル如ク証書ヲ副フヘシ如此キ軍人ハ隊中ニ在リテ恩金ノ券狀ヲ待タズ直チニ該隊ノ簿籍中ヲ除キ其郷里ニ向ケテ發程セシムヘシ

其郷里ニ於テ之ニ許可セル特別扶助金ノ第一額ヲ支給スル爲ニ下令ノ寫帖ヲ受クヘシ

將官退職令

第一條 凡ソ將官ハ多年經久ノ疾病ニ因テ非職ヲモ辭スル者ニ非レハ退職ヲ命スルコトナシ

第二條 然レモ中將少將並ニ會計監督長軍醫總監ハ年齢ニ因テ後備軍ノ軀員ニ轉スヘシ

第三條 其年齡ハ中將ハ六十二少將並ニ其相當ノ官ハ六十ヲ以テ定限トス

第四條 凡後備軍ノ軀員ニ備ハル將官ハ戰時國內ノ司令ニ非レハ現役ニ服スルコトナシ



第五條 首帥若クハ偏裨ノ司令ニ任シ曾テ戰地ニ臨ミタル將官ハ後備軍ノ驅員ニ備ハル例ニアラスト雖モ其年齡六十五ニ至レハ亦是ニ轉ス但元老院議官ニ列シ或ハ他ノ兼官ニ任スル者ハ此限ニアラス

第六條 凡ソ將官後備軍ノ驅員ニ轉スルニ當リ退職ヲ請フ者ハ恩給ヲ賜フテ之ヲ許ス陸軍恩給令附錄

第一條 陸軍々人恩給ヲ受ルノ權理ハ本令ニ揭載スルノ外コレナシト雖モ戰死或ハ公務ニ因テ死亡スル者父母或ハ幼少ノ弟妹ノミ在テ之ヲ養育スル親戚モナク飢渴ニ及フヘキモノ其府縣廳等所管ニ於テ查覈ノ上恩給令第六十九條ノ順序ヲ歷テ申告スルコアラハ其次第柄ニ因リ臨時ノ詮議ヲ以テ相當ノ扶助料ヲ給スルコアルヘシ但寡婦孤兒ノ内ニ扶助料ヲ受ルモノアルトキハ別ニ之ヲ給スルコナシ

第二條 軍屬ハ恩給ヲ受ルノ權理ナシト雖モ戰地或ハ公務ニ因テ傷疾ヲ受ケ又ハ死亡スルキハ其理由ニ因リ臨時ノ詮議ヲ以テ相當ノ扶助料ヲ給スルコアルヘシ

第三條 軍人停年未滿ニシテ恩給並罷役俸給金ヲ受ケサル者ハ當分従前ノ如ク文官一般ノ滿年賜金ヲ給ス但罷役俸給金ヲ受ルモノト雖モ滿年賜金ト比較シ其金高ノ多キ方ニ就テ給スヘシ

第四條 恩給並罷役俸給金ヲ受ルモノト雖モ其軍人ノ籍ニ列セサルノ前文官ニ奉仕

十年陸軍省令  
三十一號達ヲ  
以テ三條ノ説  
明アリ参考ス  
ベシ

俸

罷役恤金



十年一月十五日  
史官達ヲ以テ七  
等中正誤アリ

## 陸軍武官恩給並扶助料

諸卒	十三等	十二等	十一等	十等	九等	八等	七等	六等	五等	四等	三等	二等	一等	官		服役停年ニ就テノ恩給
														等	官	
五拾五圓	六拾壹圓	七拾四圓	七拾九圓	百七拾壹圓	貳百拾四圓	貳百六拾七圓	三百七拾三圓	五百圓	六百七拾五圓	八百圓	千圓	千四百圓	千六百圓	限上	最	二拾五年以 上ノ服役各 年及ヒ戰役 ノ計算ヨリ者 生スル各年 ニ當テノ増 率
四拾五圓	四拾九圓	六拾圓	六拾三圓	百貳拾八圓	百六拾圓	貳百圓	貳百八拾圓	三百七拾五圓	五百〇六圓	六百圓	七百五拾圓	千〇五拾圓	千貳百圓	限下	最	
五拾錢	六拾錢	七拾錢	八拾錢	貳圓拾五錢	貳圓七拾錢	三圓三拾五錢	四圓六拾五錢	六圓貳拾五錢	八圓四拾五錢	拾圓	拾貳圓五拾錢	拾七圓五拾錢	貳拾圓	論	傷	但此
七拾	七拾	九拾	百〇	貳百〇	貳百	三百貳	四百拾	六百	八百	九百六	千貳	千六百	千九百			



傷疾疾病ニ就テノ恩給	拾五年以	一 項	二 項	三 項	四 項	寡婦孤子扶助料	甲	乙	罷役後恩給	罷役俸	罷役恤金
	ノ服役各盲目或ハ二一肢ヲ亡シ 及ヒ戰役肢ヲ亡スル或ハ二肢ノ 計算ヨリ者 大ル各年 但服役ノ 當テノ増 長短ヲ不 論	一肢ノ用ヲ 失ヒ或ハ之 ヲ失ハス 之ニ等シキ 傷疾疾病 但同上 朱書ハ服役 各年ニ對シ 此員數ヲ増 率ス尤最上 限ノ高ヲ越 ルナシ	三項ニ比ス 戰地或ハ公 レハ一層輕 キ者ニシテ 自己ノ用辨 ニ差支ナキ 者	戰地或ハ公 服役停年ニ 因テ恩給ヲ 受ケ或ハ受 クヘキ權ヲ 有シテ死シ タル軍人ノ 寡婦孤子	服役十五年 以上ノ者服 役實期ノ年 未滿ノ者就 數ニ乘ス 役年間ノ半 ニ給ス 間ニ給ス		公務中傷疾 ヲ受ケ一等 休暇ヲ得扶 助ヲ仰ク者 ニ給ス 但滿九年 以上ノ者	寡婦孤子扶助料	甲	乙	罷役後恩給
拾圓	千九百貳十圓	千六百圓	千貳百圓	千五百圓	八百圓	八百圓	四百圓	四百圓			
七圓五拾	千六百八拾圓	千四百圓	千〇五拾圓	拾七圓五拾錢	七百圓	七百圓	三百五拾圓	貳拾圓			
貳圓五拾	千貳百圓	千圓	拾七圓五拾錢	七百五拾圓	五百圓	五百圓	貳百五拾圓				
圓	九百六拾圓	八百圓	六百圓	拾圓	四百圓	四百圓	貳拾圓				
圓四拾五	八百拾圓	六百七拾五圓	五百〇六圓	拾圓	三百三十八圓	三百三十八圓	拾六圓八拾七錢				
圓貳拾五	六百圓	五百圓	四百四拾五錢	拾圓	貳百五拾圓	貳百五拾圓	拾貳圓五拾七錢				
圓六拾五	四百拾八圓	三百七拾三圓	貳百八拾圓	拾圓	百八拾七圓	百八拾七圓	九圓三拾三錢				
圓三拾五	三百貳拾圓	貳百六拾七圓	貳百圓	拾圓	百三拾四圓	百三拾四圓	六圓六拾七錢				
圓七拾錢	貳百五拾七圓	貳百拾四圓	百六拾圓	拾圓	百〇七圓	百〇七圓	五圓三拾三錢				
圓拾五錢	貳百〇五圓	百七拾壹圓	百貳拾八圓	拾圓	八拾六圓	八拾六圓	四圓貳拾七錢				
拾錢	百〇三圓	七拾九圓	六拾三圓	拾圓	四拾圓	四拾圓	四圓貳拾七錢				
拾錢	九拾六圓	七拾四圓	六拾圓	拾圓	三拾七圓	三拾七圓	三圓				
拾錢	七拾九圓	六拾壹圓	四拾九圓	拾圓	三拾壹圓	三拾壹圓	三圓				
拾錢	七拾貳圓	五拾五圓	四拾五圓	拾圓	貳拾八圓	貳拾八圓	貳圓				

※ 終ニ至ルニ至リテ

三百三拾五



スル者ハ其年數ニ應シ滿年賜金ハ別ニ給スヘシ

第五條 本令發行ノ日ヨリ傷痍扶助及ヒ死亡ノ者祭筵家族扶助概則ハ廢止ニ屬スト雖モ發  
行以前傷痍死亡ニ因リ既ニ扶助ヲ受ルモノハ従前ノ規則ニ從フヘシ

第百九十五 明治十年一月十五日史官達

明治九年<sup>月</sup>第九十九號達陸軍武官恩給并扶助料表中傷痍疾病ニ就テノ恩給第一項七等  
四百十八圓トアルハ四百四十八圓ノ誤

第百九十六 明治十年二月三日陸軍省達

達乙第三十一號



陸軍恩給令附錄第三條中文官一般ノ滿年賜金ヲ給スト有之候得共其計算方ハ給與概則第十四章免官死亡ノ者ヘ支給ノ項ニ準シ取扱候儀ト可心得此旨相達候事

第百九十七 明治九年十二月五日陸軍省達

達第百四號

陸軍一般 府縣

今般陸軍武官恩給令被定候ニ付テハ同令中願書其他諸書式別冊之通相定候條此旨相達候事

別冊

目錄

恩給願書式

恩給願書 停年

同 傷親

恩給增加願書

同添書

恩給願書 罷役後重傷ニ至リタル者

扶助料願書 夫ノ傷親ニ基ク者

同 恩給ヲ賜リタル夫ノ死後ニ基ク者

同 夫ノ傷親疾病ニ基ク者

同 母死後遺兒ノ願

罷役後恩給願書

副書式

服役從軍明細書

人相明細書

身元履歷書

第一號罷役休暇免狀

報告抄寫

醫家診斷書式

診斷書 傷病疾病

檢査口供 同上

診斷證書 同上

覆覈口供 同上

覆覈診斷證書 同上

同 軍醫總監會議

診斷證書 傷病第四項



診察口供 市井醫員  
 診斷證書 同上  
 診斷書 死没  
 診斷證書 恤金ニ基ク者  
 疾病源因證書 同上  
 陸軍官憲證書式  
 見證証書  
 罹疫死没人證書  
 檢視證書  
 査問會議口供  
 市井官憲書式  
 男女子年齢書  
 婚姻證書  
 母死去證書  
 離別證書  
 生存證書 本人遺兒

同 寡婦  
 同 外國在留本人遺兒  
 死去證書 妻子ナキ者  
 金額受領證書 停年恩給  
 疫癘流行證書  
 金額受領證書 罷役俸  
 進達書式  
 進達書上包  
 退職恩給ノ進達書 檢問使ヨリ陸軍卿ニ進達スル者  
 同裏書 服役從軍年計算書  
 傷痍退職恩給ノ進達書 司令長官ヨリ陸軍卿へ進達スル者  
 同裏書 服役從軍年并傷痍恩給計算書  
 罷役後恩給ノ進達書  
 罷役俸ノ進達書  
 罷恤役金ノ進達書



恩給願書第一式 停年

〔令第一條第一節全第二十條同第二十四條第一節〕

〔用紙美濃紙〕

〔括弧内朱書〕

恩給願書

某儀

明治五年四月二十日徵兵ニ因テ入營仕爾來十五個年六個月服役勤績キ當明治何年何月何日ニテ最後約期滿限相成退役相願候就テハ證據ノ爲メ別紙書類何通相副進呈仕候間相當ノ恩給下賜度此段奉願候也

何兵第何聯隊第何大隊第何中隊第何號  
陸軍曹長 何某

年月日

何鎮臺

何兵第何聯隊會計會議

- 陸軍大(中)佐 何某
- 陸軍少佐 何某
- 陸軍大尉 何某
- 陸軍會計軍吏副 何某

〔此願書ハ會計官ノ注意ヲ以テ式ノ如ク作ラシム〕

〔士官以上モ上式ニ準ス〕

〔隊外ノ者ハ會議署名ヲ換ルニ所管長官ノ姓名ヲ以テス〕

〔〇令ノ第二十八條ノ年齢ニ因ル者ハ〕

定限ノ年齢ニ相成

檢閱使

陸軍少將何某殿

閱 陸軍會計何等司契何某

〔又檢閱ノ節ナラサル時ハ〕

何鎮臺司令長官

陸軍少將何某殿  
閱 陸軍會計何等司契何某

恩給願書第一式 傷病  
〔令第一條第一節全第五十條〕

〔用紙美濃紙〕

恩給願書

某儀

明治五年四月二十日徵兵ニ因テ入營仕爾來十一年二個月服役勤績キ當明治何年某地征討從軍中何月何日某ノ戰地ニ於テ面部へ銃丸相受某地陣中病院ニ於テ醫療相加候處引續キ痲衝甚シク竟ニ兩眼共失明ニ至リ服役難仕(以下前式ニ同シ)

恩給願書第三式 恩給増加ヲ願フ者  
〔令第六十二條第一節〕

〔用紙美濃紙〕

〔令第六十一條ニ登時事故アリ云々ノ願書モ同一式タルヘシ但追白ニ追テ右願書在隊中可差出ノ處何々ノ事故ニ依リ免許ノ上歸郷罷在遲延ニ及候ニ付右休服免狀相副へ差出候也(トシテ免狀寫貼ヲ副フヘシ)〕



恩給増加願書

某儀

明治五年四月廿日徵兵ニ因テ何鎮臺何兵第何聯隊編入相成爾來去何年月迄服役仕候處何月何日某地ニ於テ實地演習ノ際對兵ノ放火過テ眉間ニ中リ兩眼傷ヲ受ケ候得共全ク失明ニ至リ申サス別紙書類ノ通軍醫診斷ニ依テ第二項傷痍ニ量定相成恩給年額若干圓被下置候然ル處爾來漸々視力衰弱遂ニ重症ニ變シ候ニ付尙軍醫何某ノ診察ヲ受ケ種々療用相加候得共當何月頃ヨリ全ク盲目ニ相成候依テ別紙軍醫診察口供書診斷書并ニ離役前查覈診斷書類等相添差出候間可然御沙汰被下置度此段奉願候也

何府管下何國何郡何町村士族

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊第何號

年月日

何鎮臺司契課

御中

元兵卒 何某

〔陸軍病院并ニ軍醫ノアラサル地ニテハ〕  
視力衰弱遂ニ重症ニ至リ候處近傍ニ陸軍病院并ニ軍醫モ無之ニ付當地何大區何小區病院ニ於テ種々療用相加ヘ候得共〔云々ト記ス可シ〕

同上添書式

〔用紙美濃紙〕

恩給増加願添書

何府管下何國何郡何町村士族  
何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊第何號

元兵卒 何某

右何年何月何日某地ニ於テ實地演習ノ際對兵ノ放火過テ眉間ニ中リ兩眼傷ヲ受ケ第二項傷痍ニ量定シ恩給年額若干圓被下置候處遂ニ盲目ニ相成候就テハ可然御沙汰被下置度旨別紙ノ通願出候ニ付猶及調査候處相違無之候間相當ノ恩給下賜度此段申進候也

何鎮臺

何兵第何聯隊會計會議

年月日

陸軍大(中)佐 何某

陸軍少佐 何某

陸軍大尉 何某

陸軍會計軍吏副何某

檢閱使

陸軍少將何某殿

閱 陸軍會計何等司契何某



恩給願書第四式 罷役後重症ニ至リタル者

〔令第六十二條第二節〕

〔用紙美濃紙〕

恩給願書

某 儀

明治五年四月廿日徴兵ニ因テ何鎮臺工兵第何小隊へ編入相成爾來伍長軍曹ニ昇進當何年月何日迄服役仕候處何月何日某地砲臺築造場ニ於テ土居崩墜ノ石ニ敷カレ腰下兩足ヘ重傷ヲ被リ早速入院療用相受候處當何月初旬ニ至リ漸ク歩行出來候機相成候得共兵役ニ堪ヘサル旨醫官ノ診斷ニ因テ何月何日罷役休暇ヲ賜リ歸郷ノ上當所陸軍病院ニ於テ療用相受居候處引續キ快復ニ至ラス何月初旬ヨリハ兩足共不自由ニ相成歩行ハ勿論平座モ難仕全ク打撲ヨリ相變候旨軍醫申開候ニ付當何月中離役前查察相受候公文類軍醫診斷書覆診斷書查問會議處決書休暇免狀并ニ軍醫診察口供及ヒ診斷書共取揃ヘ差出候間可然御沙汰被下置度此段奉願候也

何鎮臺下何國何郡何町村士族 平民

〔第三式添書式ニ準シ添書ヲ作ルヘシ〕

何鎮臺工兵第何小隊

第何號

年月日

元陸軍軍曹何某<sup>①</sup>

何鎮臺司契課

御 中

恩給願書第五式 夫ノ傷疾ニ基ク者

〔令第十四條第二節全第六十五條第七十條〕

〔用紙美濃紙〕

扶助料願書

何鎮臺下何國何郡何町村士族 平民

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊

第何號

兵卒 何某

右明治五年四月廿日召募兵ヲ以テ何鎮臺何兵第何聯隊ニ編入相成當明治何年迄服役仕候處何年月某地騷亂ノ節從軍被命何國某地ニ於テ何月何日戰爭ノ際左脇下小腹部ヘ銃丸相受早速陣中病院ニ於テ療用仕其後何月何日某地歸着ノ上某地病院ニ於テ養生仕候處軍醫診斷ノ上全癒ニ至リ候得共兵役ニ堪ヘ可ラス

第二類 陸軍省



ト相決シ猶其節查問會議ニテ御檢査ノ未何月何日罷  
役休暇ヲ賜リ同日歸郷引續キ當地ニ於テ醫家相頼  
療用仕候中兎角疔々不仕何月初旬ヨリ次第重症ニ趣  
キ竟ニ何月何日午前第何時死去仕候就テハ受傷ノ砌  
見証人証書軍醫診斷書殺戮診斷書查問會議處決書内此  
一通ニテモ可ナリ然レ并ニ當地醫師診察口供診斷書  
モアラハ悉ク出スヘシ并ニ當地醫師診察口供診斷書  
共取揃ヘ差出候間可然御沙汰被下置度此段奉願候也

年月日 何府管下何國何郡何町村士族 兵卒故何某寡婦 某

同士族

何某兄弟或ハ伯叔父 從父兄弟等

証人

何某

同士族

何某

右之通相違無之候也

何府何大區何小區

年月日 何府知事 何某殿 戸長 何某

〔第三式添書式ニ準シ添書ヲ作ルヘシ〕

恩給願書第六式

〔令第六十九條ヨリ 第七十二條マデ〕  
〔用紙美濃紙〕

扶助料願書

何鎮守何兵衛何聯隊第何大隊

陸軍大尉 何某

右何年何月何日停年恩給ヲ賜リ退職罷在候處當何年  
何月何日死去仕候就テハ同人へ賜リ候恩給番號登錄  
寫帖并同人服役明細書婚姻証書(男女子在齡書)相添  
差出候間扶助料被下置度此段奉願候也

何府管下何國何郡何町村士族 陸軍大尉故何某寡婦 某

年月日

同士族

何某兄弟或ハ伯叔父 從父兄弟等

証人

何某

同士族

何某

〔男女子年齡証書ニテ寡婦ノ所生タルヲ審カニシ戸長印アラハ婚姻証書ハ出スニ及ハス〕

〔當該軍人ノ遺兒母ナキ者之ヲ願フキハ母死去証書或ハ離別証書戸長與印アル者ヲ副シ婚姻証書ハ出スニ及ハス遺兒年齡書ニハ自己并ニ兄弟ノ年齡共之ヲ載キ証スヘシ而シテ願主ノ署名ハ左ノ如シ〕

何府管下何々士族

陸軍大尉故何某長男

何某丁年ニ付無印

同士族

何某

後見人 同士族



右之通相違無之候也

年月日

何府何大區何小區  
戸長何某

何府知事  
何某殿

証人  
同士族  
何某兄弟或ハ伯叔父  
從父兄弟等  
何某  
〔其他上ニ全シ〕  
〔第三式添書式ニ準シ添書ヲ作ルヘシ〕

恩給願書第七式

寡婦扶助料夫ノ傷  
疾疾病ニ基ク者

〔令第七十一條〕

〔用紙美濃紙〕

扶助料願書

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊  
陸軍大尉 何某

右何年何月何日某地從軍中面部へ銃丸相受ケ兩目ヲ  
盲シ候ニ付傷痕恩給別紙恩給番號登錄寫帖ノ通下賜  
ハリ退職罷在候處當何年何月何日死去仕候就テハ同  
人へ賜ハリ候恩給番號登錄寫帖并右恩給下賜ノ節執  
證ニ供シ候查問會議ノ口供書（陸軍大佐何某ヨリノ

〔男女子年齢書ニテ寡婦ノ所生タル  
ヲ審カニシ戸長奥印アラハ婚姻證  
書ハ出スニ及ハス〕  
〔當該軍人ノ遺兒母ナキ者實母ノ死  
去証書或ハ離別証書ヲ出ス等ハ前  
ニ全シ其署名式モ又前ニ全シ〕

報告又ハ陸軍大尉何某等ノ見証書又傳染疫癘ナレハ  
其証書類）同人服役明細書婚姻証書（男女子年齢書）  
相添へ差出候間扶助料被下賜度此段奉願候也

何府管下何國何郡何町村士族  
平民

陸軍大尉故何某寡婦

某

年月日

〔以下前式ニ同シ〕

恩給願書第八式

母死後遺兒ノ願

〔令第七十二條末款〕

〔用紙美濃紙〕

扶助料願書

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊  
陸軍大尉故何某寡婦

某

右何年何月何日陸軍大尉故何某ニ賜リ候恩給ノ分金  
別紙恩給番號登錄寫帖ノ通賜リ來候處當何年何月何

〔長男丁年ニ至リ次子之ヲ願フ時ハ〕  
何鎮臺何々  
陸軍大尉故何某長男  
何某  
〔以上同文言〕賜リ來候處當何年何  
月何日丁年滿期相成候就テハ〔以  
下同文言〕



日死去仕候就テハ恩給番號登錄寫帖并遺兒年齡書差出候間右分金扶助料某へ被下置度此段奉願候也

何縣管下何國何郡何町村士族  
平民  
陸軍大尉故何某長男

年月日

何某未丁年ニ  
付無印

〔以下前式ニ同シ〕

〔第三式添書式ニ準シ添書ヲ作ルヘシ〕

恩給願書第九式〔令第八十四條〕

〔用紙美濃紙〕

罷役後恩給願書

某儀

何年何月何日陸軍少尉ニ任セラレ何年何月何日中尉ニ昇進服務罷在候處當何年何月ニ至リ傷冷毒ニ感シ手尼屈伸難相成病院ニ於テ養生仕候得共今以テ治功無之軍醫ノ診斷ニ因テ兵役ニ堪ユ可ラサル者ト相決シ罷役歸郷被命候就テハ服役明細書身元履歷書軍醫診斷書共取揃ヘ差出候間成規ノ通罷役後恩給被下置度此段奉願候也

〔以下第三式ニ同シ〕

〔第三式添書式ニ準シ添書ヲ作ルヘシ〕

副書類第一式〔令第二十四條第二節〕

〔用紙美濃紙〕

服役從軍明細書

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊第何號

陸軍曹長 何某<sup>①</sup>

明治六年四月廿日	第四聯隊第一大隊第六中隊卒	餞兵入營第四聯隊日記
同七年二月三日	何々ノ科ニ依リ懲罰七日間二等營倉	
同七年二月十日	第二聯隊第二大隊第一中隊へ轉ス	
同七年二月十六日	同隊一等兵卒申付	第二聯隊日記
同十二年十一月三日	北海道衛戍	同十一年二月十五日迄
同十八年五月十三日	任伍長	
同十八年七月廿日	某地外征從軍	
同十八年九月十四日	任軍曹	
同十八年九月十四日	歸京	
同十九年五月廿一日	何々ノ科ニ依リ禁錮二十八日	
同十九年九月十二日	任曹長	







父某同居		幼名何 慶應何年何ト改名 明治何年何ト改名	
職業	米商	生國下總年月日生	現年 何年何個月
父(養)	何某	同	同
母(養)(繼)某		同	同
妻(二度) 某 <small>何府(縣)士族(平民)何某長女(姉)(妹)何年何月結婚</small>		同	同
長男 何某		同	同
次男 何某		同	同
長女 某		同	同
何年何月父ト共ニ何國何郡何町村へ移住			
何年何月何日教導團へ志願ノ者召募ニ付願ノ上入團或ハ何年何月何日徴兵ニ因テ入營			
年月日			

副書類第四 (令六十二條第二節)

〔用紙鳥ノ子紙 竪七寸 横一尺〕

何鎮臺 第一號罷役休暇免狀

何縣管下何國何郡何町村士族 平民

何兵第何聯隊第何大隊第何中隊第何號

兵卒 何某

何年何月何日編入

右何年何月何日公務ニ因テ或ハ某地取 傷疾ヲ受ケテ 或ハ病疾ニ 裏書ノ如ク軍醫診斷并覆數診斷ニ因テ終身兵役ニ堪ユ可ラサル者ト相決ス依テ此免狀ヲ以テ休暇ヲ賜フ者也

何鎮臺指令長官

年月日

陸軍少將

何某

陸軍會計何等司契何某

副書類第五 (令第五十一條末款)

〔用紙美濃紙〕

〔是レニ服役明細書并ニ人相明細書ヲ付ス同一紙タルモ妨ナシ〕

〔裏面ハ醫家診斷書類ノ第三第五式ヲ並ヘ書スヘシ〕



何年某地ノ役報告第何號抄寫  
本日當聯隊第何大隊前衛隊トシテ何村迄繰出シ(戰地ノ景況ヲ記ス)竟ニ午後第何時何十分敵兵敗走云々尙當日本隊死傷ノ者左ノ通ニ候也

死 頭腦傷

第何中隊

兵卒 何某

傷 面部

陸軍軍曹何某

同 左股

兵卒 何某

年月日

前衛何兵第何大隊長

陸軍少佐 何某

第何聯隊長

陸軍大(中)佐何某

醫家診斷書類第一式 (令第五十二條)

〔用紙鳥ノ子紙 縦七寸 横一尺〕

診斷書

何鎮遠何兵第何聯隊第何大隊

陸軍大尉 何某

右何年何月何日某地役中斥候先ニ於テ銃丸相受ケ左股外眼睫上何寸許ノ部位ヲ貫キ當日直ニ陣中病院ニ於テ洗滌何々ノ治療相施シ一旦快復ニ及ヒ服務罷在候處何年何月中傷所再發ニ付當病院へ入院ノ上療用差加ヘ再度平癒ノ姿ニ相見ニ候得共又何月中炊衝相發シ候ニ付最後寢醫何某ノ診察ヲ以テ部位截斷種々治療相施シ候然ルニ筋維既ニ腐蝕ニ屬シ候上ハ傷所ハ平癒ニ至リ候共左足ノ用ヲ失ヒ所詮服役相成候見居無之此段及診斷候也

〔疾病ナラハ〕

右何年何月何日ヨリ某地ニ於テ何々ノ時該地ノ冷毒ニ感冒シ四肢疼痛酷烈ニ及ヒ候ニ付某病院ニ於テ何々ノ治療相施シ或ハ温泉入浴ヲ以テ加養致シ候然ルニ左肢腫瘍漸々濃潰遂ニ屈伸スルヲ能ハス不具ニ屬シ候上ハ痲痛ハ平癒ニ至リ候也(以下同文言)

〔市井病院長ヨリ出スルハ〕

何縣何大區何小區

病院長 何某

主任醫 何某

年月日

何病院長

陸軍何等軍醫正 何某

主任醫官

陸軍軍醫 何某

醫家診斷書類第二式 (令第五十四條)

〔用紙鳥ノ子紙 縦七寸 横一尺〕

検査日供

何鎮遠何兵第何聯隊第何大隊

陸軍大尉 何某

第二類 陸軍省



右診察ヲ遂候處脈候何度否昔何々形容羸瘦飲食何々  
傷所ハ創口ヨリモ内部ノ腐蝕甚シク截斷ノ部分ハ平  
癒スト雖モ今以テ創口尙腫痛アリテ膿汁ヲ醸セリ然  
レ生命ニ害ナク何個月モ相立候ハ、創口平癒ニ至ル  
ヘシ此段及檢査也

陸軍軍醫 何某  
陸軍軍醫 何某

醫家診斷書類第三式 [令第五十五條]

[用紙鳥ノ子紙 縦七寸 横一尺]

診斷證書

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊 陸軍大尉 何某  
右爾後創口平癒ニ至ルト雖モ服務ニ堪フ可ラス傷痍  
ハ唯一肢ノ用ヲ失フ者ニ係リ恩給令第十一條第三節  
ニ準テ第三項ニ屬ス此段及診斷候也

年月日 陸軍軍醫 何某  
會計會議員ノ前ニ於テ 陸軍軍醫 何某

[第一式診斷書市井病院長ヨリ出ス  
キハ此口供書ヲ作ルヘシ陸軍病院  
長ヨリ出スキハ之レニ及ハス]

醫家診斷書類第四式 [令第五十六條]

[用紙鳥ノ子紙 縦七寸 横一尺]

覆覈口供 何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊 陸軍大尉 何某  
右症候陸軍軍醫何某等ノ檢査口供ニ因ルニ逐一符合  
疑フ可キ麻無之候也

年月日 陸軍何等軍醫正 何某  
陸軍何等軍醫正 何某  
陸軍會計何等司契 何某

醫家診斷書類第五式 [令第五十六條]

[用紙鳥ノ子紙 縦七寸 横一尺]

覆覈診斷證書 何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊 陸軍大尉 何某  
右傷痍陸軍軍醫何某等診斷ニ及ヒ第三項ニ策定スル  
者至當ニ有之候也

年月日 陸軍何等軍醫正 何某  
陸軍何等軍醫正 何某

[第一式ノ診斷書市井病院長ヨリ出  
スキハ此口供書ヲ作ルヘシ陸軍病  
院長ヨリ出スキハ之レニ及ハス]



醫家診斷書類第六式 〔令第七十六條〕

〔用紙鳥ノ子紙(縦七寸 横一尺)〕

覆數診斷證書

何鎮憲何兵第何聯隊第何大隊  
陸軍大尉 何某

〔疾病ナラハ〕

〔第一式下款ニ準スヘシ〕

右何年何月何日某地役中斥候先ニ於テ銃丸相受ケ左股外腸腰上何寸許ノ部位ヲ貫キ當日直ニ陣中病院ニ於テ洗滌何々ノ治療相施シ一旦快復ニ及ヒ服務罷在候處何年何月中傷所再發ニ付其病院ニ入院ノ上療用差加ヘ再度平癒ノ姿ニ相見ヘ候得共又何月中喉術相發シ候ニ付後陸軍電醫何某ノ診察ヲ以テ部位截斷種々治療相施シ候然ルニ筋脈既ニ腐蝕ニ屬シ候上ハ傷所ハ平癒ニ至リ候モ所詮服役難相成ト陸軍何等軍醫正何某始メ陸軍電醫何某同何某等診斷ニ及ヒ傷痕ハ唯左足ノ用ヲ失フ者ニ係リ陸軍恩給令第十一條第三節ニ準シ第三項ニ策定スル者至當ニ有之候也

年月日  
陸軍軍醫總監 何某  
陸軍軍醫監 何某  
陸軍何等軍醫正 何某

醫家診斷書類第七式

〔用紙鳥ノ子紙(縦七寸 横一尺)〕

診斷證書

何鎮憲何兵第何聯隊第何大隊第何中隊  
第何號  
陸軍曹長 何某

〔傷痕最初ヨリ第四項ニ確認スル者ハ第一第三第五式ヲ兼ル此書式ヲ用ヒ別ニ第一第三第五式ヲ作ルニ及ハス〕

右何年何月何日〔中略〕  
〔但第一式ノ文言ニ全シ〕  
然ルニ身體衰弱ニ屬シ候上ハ截斷ノ部分ハ平癒ニ至リ一肢ノ用ヲ失ヒシ者ニ比スレハ一層輕ク全ク自己ノ用辨ニハ差支ナキ者ニ候得共所詮服役相成候見居無之傷痕ハ恩給令第十一條第四節ニ準シ第四項ニ策定以此段及診斷候也

年月日  
陸軍何等軍醫正 何某  
陸軍軍醫 何某  
陸軍軍醫 何某

〔主任ハ主任醫官ト記スヘシ〕

醫家診斷書類第八式 〔令第六十二條第三節〕

〔用紙鳥ノ子紙ノ類(縦七寸 横一尺)〕

第二類 陸軍省



診察口供

何縣管下何國何郡何町村<sup>士族</sup>  
何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊  
第何號

元 陸軍軍曹 何某

右何年何月何日歸郷後遂診察候處爾時脈候何度症候  
何々形容何々飲食如何創痍如何ニ付服藥何々外傳蒸  
湯手當等何々致シ若クハ截斷何々等致シ候得共引續  
キ重症ニ變シ何々症候相見ハレ候ニ付又何々手當等  
致シ何月中旬以來漸次快方ニ趣キ創口漸ク收縮此順  
ニテハ生命ニ害ナク以往何個月モ相立候ハ、平癒ニ  
至ル可ク候得共右重症ニ變シ候以來截斷若クハ何々  
等ニテ全ク二肢ノ用ヲ失ヒ候者ニ付別紙ノ通診斷証  
書相認メ候也

年月日 何縣管下何國何郡何町村<sup>士族</sup>  
主任醫 何某<sup>㊦</sup>

同何所<sup>士族</sup>  
平民

相談醫 何某<sup>㊦</sup>

同 何某<sup>㊦</sup>

醫家診斷書類第九式〔令第六十三條第三節〕

〔用紙鳥ノ子紙ノ類<sup>七寸</sup>横一尺〕

診斷證書

何縣管下何國何郡何町村<sup>士族</sup>  
何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊  
第何號 元 陸軍軍曹 何某

右傷痕爾後平癒ニ至ルト雖モ兵役ニ堪ユ可ラス傷痕  
ハ兩脚ノ用ヲ失フ者ニ係ル此段及診斷候也

年月日 何縣管下何國何郡何町村<sup>士族</sup>  
主任醫 何某<sup>㊦</sup>

同何所<sup>士族</sup>  
平民

相談醫 何某<sup>㊦</sup>

同 何某<sup>㊦</sup>

右診斷面アグリ之レヲ檢シ候也  
年月日 何縣何官 何某<sup>㊦</sup>

醫家診斷書類第十式〔令第六十六條〕

〔用紙鳥ノ子紙<sup>七寸</sup>横一尺〕

〔軍醫ハ恩給令第十一條第何節ニ準  
シ第何項ト書スト雖モ市井ノ醫ハ  
唯兩脚一肢左眼口鼻等ノ字ヲ書ス  
可シ〕



診斷書

何鎮憲何兵第何聯隊第何大隊第何中隊  
第何號

陸軍軍曹 何某

右死没故ハ全ク傳染コレラ病ニテ當何年何月何日  
夜中某地ニ於テ巡邏ノ際病屍檢査ニ及ヒ當務無據場  
合ヨリ感染ニ有之此段及診斷候也

同病院長 何某

陸軍何等軍醫正 何某

主任醫官

陸軍軍醫 何某

醫家診斷書類第十二式

〔恤金令第十六條第一節〕〔用紙鳥ノ子紙(七寸)〕

診斷證書

何鎮憲何兵第何聯隊第何大隊第何中隊  
第何號

兵 卒 何某

當何年何月何年何個月  
右何年何月何日某練兵場ニ於テ操練ノ際過テ右肩ヲ

(市井ノ醫員ナラハ)

何縣管下何國何郡何町村士族

主任醫 何某

同何所士族

相談醫 何某

打撲シ肩胛骨ノ疼痛動カスレハ發スル者ニテ兵役ニ  
堪ユ可ラス此段及診斷候也

年月日

診斷 陸軍軍醫 何某

會計會職員ノ前ニ於テ

覆取 陸軍軍醫 何某

醫家診斷書類第十二式

〔恤金令第十六條第三節〕〔用紙鳥ノ子紙(七寸)〕

疾病源因證書

何鎮憲何兵第何聯隊第何大隊第何中隊  
第何號

兵 卒 何某

右入營以來健康ニ候處何年何月某地ニ於テ野營演習  
ノ際何日終夜更替ヲ得ヌ歩哨相勤メ翌朝ヨリ發熱右  
足疼痛シ遂ニ肩胛骨儀ニ及テ全ク該夜冷毒ノ感冒ニ  
有之候也

年月日

陸軍軍醫 何某

陸軍官憲證書類第一式

〔令第五十一條〕〔用紙美濃紙〕

第二類 陸軍省



見證證書

何兵第何聯隊第何大隊第何中隊  
第何號

陸軍軍曹 何某

右何年何月何日某地ニ於テ當聯隊ノ前衛第何大隊何  
村銃戰ノ節左頬ニ流丸ヲ受ケルヲ見認候也

何續臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊

年月日

何官ノ前ニ於テ

陸軍曹長 何某

見證人

陸軍伍長 何某

同

兵卒 何某

陸軍官憲證書類第二式

〔令第六十六條第二節〕〔用紙美濃紙〕

罹疫死没入證書

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊  
第何號

陸軍軍曹 何某

右何年何月何日午後何時ヨリ翌何日午前何時迄巡邏

陸軍官憲證書類第三式

〔令第六十六條第三節〕〔用紙美濃紙〕

檢視證書

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊  
第何號

陸軍軍曹 何某

右死去ノ節左ノ兩醫別紙ノ通及診斷候處面アグリ之  
レヲ檢シ候也

某地分遣第何聯隊第何大隊副官

年月日

陸軍中尉 何某

何縣管下何國何郡何町村  
士族 平民

相勸メ候際本塞外第一柵門ノ傍ニ於テ死屍有之不審  
ノ者ニ付遂檢査候處全ク行倒人ニ有之取片付方申付  
候其節ヨリ氣分惡敷更番後發熱其敷ニ付隊附軍醫何  
某ノ指揮ニテ早速入院爲致療用相加候得共竟ニ無其  
効驗何月何日死去致シ候右死屍取片付ノ儀當務無據  
備ニ有之候也

某要塞參謀長

陸軍大佐 何某

年月日

〔陸軍官憲ナキ時ハ〕

何縣何大區何小區

戶長

何某



主任醫 何某  
 同何所 平氏  
 相談醫 何某

陸軍官憲證書類第四式  
 (令第五十一條)  
 (用紙美濃紙)

何鎮 查問會 何年  
 何兵科

出席(無之被問人) 非職 陸軍大尉 何某  
 右三年來非職之故ヲ以テ何年何月何日特派ノ委員集  
 會スル左ノ如シ

第一議長 何官 何某  
 第二議員 何官 何某  
 第三同 何官 何某  
 第四同 何官 何某  
 第五司令官 何官 何某  
 第六人 何官 何某  
 第七人 何官 何某  
 右列席ノ上ニ對シテ其本人身上ニ就テ受領シタル  
 關係書類ヲ演讀スル左ノ如シ

第一本人口供

某申立ル旨趣ハ何年何月何日試驗ノ上士官學校へ入  
 校其後何年何月何日ノ成學試驗合格ニ依テ何年何月  
 何日陸軍少尉ニ任セラレ何鎮臺第何聯隊第何大隊第  
 何中隊附仰付ラレ何年何月何日迄勤仕何年何月何日  
 中尉ニ任セラレ同年何月何日大尉ニ任セラレ候<sup>右ハ別紙從軍ハ</sup>  
 股役明細<sup>別紙</sup>其後何年何月何日某地征討ニ付從軍命セラレ  
 何月何日同隊一同出發何月何日彼地着<sup>右ハ別紙從軍然</sup>  
 ル處當時役中何月何日何村對陣ノ節午前第何時辰候  
 ノ命ヲ受テ少尉何某曹長何某、二騎探馬ニ罷出候處  
 敵陣ヨリ何町許ノ處ニテ突然敵ノ候騎ニ出逢ヒ身ヲ  
 隠スニ暇ナク折衝敵騎ヨリ發シ候銃丸左股外腿膝上  
 何寸許<sup>即チ委員</sup>檢査ノ處、部位ヲ貫キ傷痕相受候<sup>右ハ同時探察人少</sup>  
 見<sup>見座大佐何某ノ</sup>當日歸營隊情申述即時陣中病院ニテ軍  
 醫何某ノ療用相受テ何十日間ニテ一旦恢復服務罷在  
 候處其後何十日計相立何年何月何日頃ヨリ再ヒ  
 傷所療術(此所查問會議ナレ候故)相發候ニ付歸鄉療  
 用相願軍醫何某診斷ノ上<sup>診斷書別</sup>何月何日歸營命セラ

第二類 陸軍省



何月何日着京同何日非職命セラレ歸郷保養罷在別紙市井醫員何某證書ノ通療用相受候得共當何年何月迄再度平癒再度共再發ニ及ヒ傷處腐敗筋維迄腐蝕ニ至リ候也

第二 服役從軍明細書 別紙

何々云々

第三 見証人証書

何々云々

第四 市井醫員診察口供并診斷書

何々云々

右演讀了リ職列醫官查問ノ後醫官診察ヲ遂ケ覆發診斷書ヲ作ル左ノ如シ

覆發診斷書

何々云々

陸軍軍醫 何某  
陸軍軍醫副 何某

右ニ因テ委員處決スル所左ノ如シ

〔甲〕

本人兵役ニ堪ユ可ラス因テ退職ヲ命セラルヘキ者

〔服役從軍明細書ハ別紙ニ爲スヘシ〕

〔見証人証書ハ茲ニ記入スヘシ〕

〔第四同前〕

〔覆發診斷書ハ直チニ此ニ書記シ醫官調印スヘシ〕

〔乙〕 本人兵役ニ服スルニ堪ユヘシ

〔丙〕 本人ノ病症審確ナラス因テ

ニ有之候也

議長	何某
議員	何某
同	何某
同	何某
同	何某
可告	何某

市井官憲證書類第一式 〔令第七十三條〕

〔用紙美濃紙〕

男女子年齡書

陸軍大尉 故 何某男女子

何府管下何國何郡何町村士族何某妻

○何年何月何日生 長女某 二十年

母ハ何府管下何國何郡何町村士族何某長女某亡

嗣子 何年何月何日生 長男何某 十八年十一月

母ハ同上 何年何月何日生 次女某 十二年九個月

母ハ何府管下何々何某三女某離別

何年何月何日生 次男何某 十一年九個月

士官並ニ隊外下士以下ナラハ郷里ニ歸養セシメ(隊附下士以下ナラハ)本隊若シクハ病院ニ於テ保養セシメ追テ再檢査ニ及フヘク候也

〔若シ前籍ノ時ニ在テ人ノ養子トナリ或ハ嫁シ本區ノ籍ニ詳カナラサル者ハ〕

但長女某三男何某ハ送籍前ニ在ルヲ以テ當區戸籍ニ記載セスト雖ヒ其親族若クハ同區戸主何某ノ證書ニ因リ候也〔ト記スヘシ〕

第二類 陸軍省



母ハ何縣管下何々何某次女某  
 何縣管下何國何郡何町村士族 平民 何某養子  
 〇〇何年何月何日生 三男何某 十年八個月  
 母ハ同上  
 右ノ通管區戶籍ニ記載有之候也  
 何縣何大區何小區  
 戶長 何某

市井官憲證書類第二式 [令第七十二條]  
 [用紙美濃紙]

婚姻證書  
 何縣管下何國何郡何町村士族 平民  
 陸軍中尉 故何某  
 當時何年何月何年何個月  
 何縣管下何國何郡何町村士族 平民  
 何某次女  
 當時何年何月何年何個月  
 右何年何月何日當區ニ於テ婚姻ヲ整ヘタル旨戶籍ニ  
 記載有之候也

[若シ現住移住地ニシテ結婚先住地ニアラハ]  
 右何年何月何日結婚ノ旨何年何月當區ニ移住ノ旨何(府縣)管下何大區何小區ヨリ送籍ノ旨戶籍ニ記載有之候也  
 [年齡ノ上ニ當時トアルハ結婚ノ時ヲ云恩給令欽定ノ以前結婚ノ者ハ] 右婚姻ハ何年何月何日何時或ハ何(府縣)廳等ノ許可ニ依テ之ヲ整候也(ト記スヘシ)  
 [若シ再三移住ナレハ前文ノ通ニテ餘白ニ嫁婦ヨリ]  
 何年何月某地ニ結婚何年何月

何縣何大區何小區  
 年月日  
 戶長 何某  
 右婚姻ハ何年何月何日陸軍卿ノ許可ニ依テ之ヲ整候也  
 何某寡婦

市井官憲證書類第三式 [令第七十三條]  
 [用紙美濃紙]

母死去證書  
 陸軍大尉 故何某妻  
 同人嗣子何某母  
 某  
 右何年何月何日死去ニ及テ段届出候旨當區戶籍ニ記載有之候也  
 何縣何大區何小區  
 戶長 何某

市井官憲證書類第四式 [令第七十三條]  
 [用紙美濃紙]

第二類 陸軍省

何(府縣)管下何大區何小區ニ移住何年何月何(府縣)管下何々ニ移住何年何月當何大區何小區ニ移住(ト記スヘシ但同(府縣)内ノ移住ハ之ニ及ハス)



離別證書

何縣管下何國何郡何町村士族平民

陸軍中尉 故 何某

當時何年何月何年何個月

何縣管下何國何郡何町村士族平民

何某三女 某

當時何年何月何年何個月

右何年何月何日結婚ノ處何年何月何日離別ニ及フ段  
届出候ニ付何某ノ戶籍ヲ削リ某ヲ本區ニ送籍致シ候  
也

何縣何大區何小區

戶長

何某

〔若シ現住地ニナク離婚ノ事先住地ニ在ラハ〕  
何縣管下何々  
陸軍中尉 故 何某  
右何年何月何日當區へ移住ノ節  
戶籍ニハ單身ニ有之候也  
但離別ノ妻ニ出生ノ男何人女  
何人アリ共ニ送籍狀ニ具シ候  
也  
〔年齡ノ上ニ當時トアルハ離別ノ時  
ヲ云〕

市井官憲證書類第五式〔令第八十八條〕

〔用紙美濃紙〕

生存證書

何年何月何日退職

陸軍中佐

何某

〔遺兒ノ生存證書ハ是ニ全シ唯前名  
ノ異ナル處ハ〕  
何年何月何日退職

當何年何月何年何個月

右現ニ存生タルハ面アタリ之ヲ檢スル處ニシテ當區  
戶籍ニ有之候也

但當區務所ニ於テ之ヲ檢ス

〔病氣ナラハ〕

本人病氣ニ付其居宅ニ就テ之ヲ檢ス

〔又他家ニ寄寓スレハ〕

現住當區内何某ノ宅ニ於テ之ヲ檢ス

何縣何大區何小區

戶長

何某

陸軍中佐 故 何某長男

何某

當何年何月何年何個月

市井官憲證書類第六式〔令第八十八條〕

〔用紙美濃紙〕

生存證書

何年何月何日退職

陸軍中佐 故 何某寡婦

某

當何年何月何年何個月

右現ニ存生タルハ面アタリ之ヲ檢スル處ニシテ當區  
戶籍ニ有之且再嫁セサル證據ノ爲メ左ノ親戚同郷戶

〔寡婦ノ檢査ハ戶長又代理ニテモ必  
ス其居宅ニ就テ之ヲナスヲ法トス  
又再嫁セサルノ證人ハ其夫方ノ親  
戚ニ限ルト雖モ若其親戚ナキ者ハ  
同郷戶主二名ニテ証スルモ可ナリ〕



主ノ者署名捺印致シ候也

但シ其居室ニ就テ之ヲ檢ス

(他家ニ寄寓スレハ)

現住當區内何某ノ宅ニ於テ之ヲ檢ス

何縣管下何國何郡何町村士族  
平民

本人何某兄弟或ハ伯叔父  
從父兄弟等

年月日

同何所士族  
平民

本人同郷

何府何大區何小區

戶長

何某

何某

市井官憲證書類第七式 (令第八十八條未款)

[用紙美濃紙]

生存證書

何年何月何日退職

陸軍大尉 何某

當何年何月何年何個月

右何年何月何日ヨリ米國紐約府在留ニテ當領事監視

[遺兒ナラハ]

何年何月何日退職

陸軍大尉 故何某長男  
次男

何某

當何年何月何年何個月

ノ下ニ屬シ學術研究ヲ業トス今現ニ生存タルハ面ア  
タリ之ヲ檢ス因テ下賜ノ金額ヲ交付致シ候也

米國紐約府在留

年月日

領事

何某

市井官憲證書類第八式 (令第八十九條)

[用紙美濃紙]

死去證書

何年何月何日退職

陸軍大尉 何某

右何年何月何日死去ニ及フ段届出候且同人ニ妻子等  
無之候也

何府何大區何小區

年月日

戶長

何某

市井官憲證書類第八式附屬

(令第八十八條)

[用紙美濃紙]

金額受領證書

[停年恩給金額]

一金何拾圓也

何年何月何日退職

陸軍大尉

何某

[寡婦扶助料ナラハ]

寡婦扶助料金額 何年何月何日退職

一金何圓也

陸軍大尉 故何某寡婦

某

[領事ナキ地ニテ唯其國若クハ近國  
ニ駐劄公使アラハ公使館ノ書記官  
ニテ領事ノ事ヲ行フヘシ]

[其恩給分金傳ヘテ未子ニ至リ丁年  
ニ及ヒ權利消絶ニ屬スル者ハ當人  
若クハ其後見人丁年ニ至リタル旨  
ヲ書記シ証書ヲ奉還スヘシ]  
[死去證書ハ前三個月ノ中ノ日附ヲ  
見替ヘハ三月十五日トアリテ四月  
ニ支給スル時ハ第一期金額日割ヲ  
以テ給シ其殘金ハ証書ト共ニ(府  
縣)廳ヨリ大藏省ヘ還付スヘシ]

第二類 陸軍省

二百四十五



右明治何年第一期三個月分ノ金額正ニ受領候也

〔令第八十七條〕

何府廳又ハ何縣何大區ニ於テ  
何縣廳何小區區務所

何縣管下何國何郡何町村士族  
平民

年月日

何某<sup>㊦</sup>

〔遺兒扶助料ナラハ〕  
遺兒扶助料金額 何年何月何日退職

一金何圓也 陸軍大尉 故何某長男

〔傷疾恩給ナラハ〕 何某

傷疾恩給金額

一金何圓也 同上

〔外國ナラハ〕 總督府領事館ニ於テ

〔受領人代人ナラハ〕 何某代人  
何某<sup>㊦</sup>

市井官憲證書類第九式

〔令第六十六條第一節〕

〔用紙美濃紙〕

疫癘流行證書

明治何年夏中當管内地方疫癘流行洋名コレラト唱フ  
ル傳染病ニテ寒熱暴瀉ヲ定症トシテ甚シキハ半日許  
數十行ニシテ死ニ至ル者アリ當大區内ハ五月下旬ヨ  
リ起リ七月中旬迄尤旺盛ノ時トシ七月下旬ヨリハ其  
勢稍衰ヘ傳染全ク絶ヘスト雖ヒ死者稀ニシテ八月中  
旬ニ至テハ全ク止息セリ凡ソ此疫癘ニ罹リ死ニ至ル

者當小區内六月中ニテ十三人計ニ至ル右疫癘流行ノ  
証如此候也

何縣何大區何小區

年月日

戶長 何某<sup>㊦</sup>

市井官憲證書類附屬

〔罷役俸令第六條〕

〔用紙美濃紙〕

金額受領證書

何年何月何日罷役

一金三拾三圓貳拾五錢也

陸軍中尉 何某

右明治何年第一期三個月分金額正ニ受領候也

何縣管下何國何郡何町村士族  
平民

年月日

何某<sup>㊦</sup>

右現ニ存生タルハ面アタリ之ヲ檢スル處ニシテ當區  
戶籍ニ有之候也

何縣何大區何小區

年月日

戶長 何某<sup>㊦</sup>



進達書類第一式〔令第二十四條第四節〕

上包〔用紙美濃紙〕

〔第何號〕  
何年何月何日

退職恩給進達書

第一號 本人願書

檢閱使

第二號 身元履歷書

陸軍少將 何某

第三號 服役從軍明細書

第四號 進達書

〔此番號ハ一軍管内檢閱ノ順序ニ因ルモノニシテ檢閱使ノ命令ニテ記入シ且特別急速ヲ要スルモノハ上包ニ朱ニテ急ノ字ヲ記スベシ〕

進達書類第二式 檢閱使ヨリ陸軍卿ニ進達スル者

〔令第二十五條〕

〔用紙烏ノ子紙 竪七寸 横一尺〕

何鎮臺何兵第何聯隊第何大隊第何中隊  
第何號

陸軍曹長 何某

右此度年期滿限ニ因テ別紙第一號ノ通退役願出候ニ付檢閱ノ上尙

服役從軍明細書查覈ニ及ヒ候處何年何月何日入營當何年何月何日

〔表〕

迄服役實期何々年中間何年何月何日ヨリ何年何月何日迄北海道備  
成相勘ノ何年何月何日某國征討從軍發程何年何月何日歸營此服役  
從軍實期前後通シテ何年何ヶ月裏面計算書ノ通ニ有之候上ハ明治  
九年十月廿三日欽定恩給令ニ基キ恩給ヲ賜ハルヘキ者ニ候依之查  
覈ノ明細書等包收此段申進候也

年月日

檢閱使  
陸軍少將 何某

陸軍卿何某殿

表書ノ者

服役從軍年計算書

年	月	日	實	期	服役從軍年通算
明治五年	四月	廿日	入營	一々年十月廿六日	一々年十月廿六日
全 七年	三月	十五日	任伍長	二々年十一月	二々年十一月
全 十年	二月	十五日	任軍曹	七々年二月廿七日	七々年二月廿七日
全 十七年	五月	十二日			

第二類 陸軍省



全	年	五	月	十三日	任曹長															
全	年	九	月	十四日																
全	年	九	月	十五日																
全	廿五年	四	月	十九日																
全	年	五	月	十六日																
全	年	四	月	廿二日																
全	年	四	月	廿一日																
全	年	五	月	十八日																
					四ヶ月二日	外征ニ付 二ヶ年	七ヶ年七ヶ月五日	總計二十五ヶ年	一ヶ月	半ヶ年	總計七ヶ月	廿四ヶ年五ヶ月	此年額 若干圓	十五年最下 限滿期	差引	此年額 若干圓	餘九ヶ年各年ニ當 テ増買ヲ乘率ス	合計年額	若干圓 四度ノ金額 若干圓	

進達書類第三式 (令第五十七條) (用紙鳥ノ子紙 縦七寸 横一尺)

檢閱使隨行 閱陸軍會計何等副監督何某

〔表〕

右何年何月何日某地役中斥候先ニ於テ銃丸相受左股外腿膝上何寸計ノ部位ヲ貫キ爾後種々療用相施シ候得共竟ニ左足ノ用ヲ失ヒ兵役ニ堪ヘ難ク退役願出候就テハ裏面計算書ノ通ニ有之候上ハ明治九年十月廿三日欽定恩給令ニ基キ傷痕退職恩給ヲ賜ハルヘキ者ニ候依テ軍醫診斷書報告抄寫帖并本人服役明細書身元履歷書等包收此段申進候也

何兵第何聯隊第何大隊 陸軍大尉 何某

何鎮臺司令長官 陸軍少將 何某

年	月	日	入校	實	期	服役從軍年通算
明治八年	三月	一日	入校	二ヶ年		二ヶ年
全十年	二月	廿八日				
全十年	三月	一日	任少尉			
全十一年	二月	一日				

第二類 陸軍省

〔若シ一旦非職又ハ罷役ニ入ルノ後ナラハ〕  
 部位ヲ貫キ爾後種々療用ノ未何年何月何日非職命セラレ爾後何病院ニ於テ療用相加ヘ候得共云々  
 退職願出候就テハ軍醫何某等檢査ノ上何等軍醫正何某等覆致ニ及ヒ候處不治ノ症ニテ一肢ノ用ヲ失フ例ニ屬スル旨(就テハ當鎮臺査問會議ニテ別紙口供ノ通執證ニ及ヒ候)以下同文言







兵役ニ不可堪旨ニ相定リ罷役願出何府管下何國何郡  
何町村へ罷歸療用仕度旨申立候右ハ十一ヶ年滿限ノ  
者ニ付罷役俸令第二條ニ基キ罷役俸被下置度依テ軍  
醫診斷書查問會議處決書疾病源因証書服役明細書身  
元履歷書共取揃此段申進候也

何鎮臺司令長官

陸軍少將 何某

陸軍卿何某殿

進達書類第六式 罷役恤金

〔恤金令第十六條并第十八條〕 〔用紙美濃紙〕

罷役恤金願進達書

砲兵第何大隊第何小隊

第何號

砲卒 何某

右何年何月何日當隊へ編入爾後勉勵服務罷在候處當  
何年何月何日某練兵場ニ於テ砲車ノ衝突ニ遭ヒ車下  
ニ轉跌スルノ際強ク前車ノ轆端肩胛骨ニ當リ該骨損  
缺ニ及ヒ候依テ早速入院手當爲致候得共不治兵役ニ

堪ニ可ラサル者ト診斷相成候就テハ本人罷役願出當  
里何府縣管下何國何郡何町村へ罷歸療用仕度旨申立  
候右ハ滿九ヶ年以上ノ者ニ付恤金令第十一條ニ基キ  
罷役恤金被下置度依テ軍醫診斷證書疾病原因證書服  
役明細書身元履歷書共取揃此段申進候也

砲兵第何大隊長

陸軍少佐 何某

何鎮臺司令長官

陸軍少將何某殿

書式中連名ヲ以テ進呈スルモノ宛名アルトハ  
其宛名ニ對スル方ヲ上官トシ順序ニ認ムヘシ

第百九十八 明治十年八月六日陸軍省達

達甲第二十一號

客歲十二月達第二百四號ヲ以陸軍武官恩給令中願書其他諸書式相達候處右附錄別冊之通相  
定候此旨相達候事別冊略之

第百九十九 明治十一年三月廿三日陸軍省達

達甲第十號

府

縣

第二類 陸軍省

二百五十五







營外禁足	五週日	(三週日)	三ヶ月	二等營倉ノ日數ヲ以テ原トシ餘ハ皆此日數ニ比準シテ除算ス
同	四週日	(十五日)	二ヶ月	
同	三週日	(十日)	一ヶ月	
同	二週日	(一週日)	除算セス	
同	一週日	(三日)	三ヶ月	
使役	十週日	(三週日)	二ヶ月	
同	八週日	(十五日)	一ヶ月	
同	六週日	(十日)	除算セス	
同	四週日	(一週日)	三ヶ月	
同	二週日	(五日)	二ヶ月	
同	一週日	(三日)	一ヶ月	
同	除算セス			

第二百一 明治十一年七月二十日陸軍省達

達甲第十七號

陸軍各局各官廳  
府 縣

陸軍恩給令諸書式中別紙之通加除並正誤候條此旨相達候事

別紙

恩給令諸書式中加除並正誤

- 一 恩給令諸書式恩給願書第五式ノ欄外令第十四條ノ上ニ(令第十二條)ノ文字ヲ加フ
- 一 同第五式第六式第七式第八式ノ欄外(第三式添書式ニ準シ添書ヲ作クルヘシ)ノ文字ヲ刪

除ス

- 一 同副書類第一式ノ欄外へ(令第七十一條ニ係ル明細書ハ各自ノ軍隊手帖或ハ私記ニ因リテ書載シ第何聯隊日記ノ文字ヲ除クヘシ)ト朱字ニテ加フ
- 一 同醫家診斷書類第一式第十式(診斷書)ヲ(診斷證書)ニ改ム
- 一 同陸軍官憲證書類第三式ノ欄外陸軍官憲ナキ時ハノ次へ(何府何官何某<sup>㊦</sup>)ノ文字ヲ加へ何府何大區何小區ノ肩ニ(府縣廳ハ數里ノ距離ニシテ官員出張差支ル時ハ)ト朱字ニテ加フ
- 一 同市井官憲證書類第一式ニ(令第七十二條)ハ(令第七十一條)ノ誤
- 一 同進達書類第三式裏面實期區書中服役從軍七ヶ年ノ次へ(二十分増加)ヲ(増員乘率)ト改

第二百一 明治十一年十月廿六日達

第四拾六號

官省院使府縣

明治九年(十月)第九十九號達陸軍恩給令中左ノ通改正シ并該令附録へ第六條ヲ追加候條此旨相達候事

恩給令中改正

- 一 恩給令第四條第一款(管刑或ハ)ノ文字ヲ刪除ス
- 一 同第十四條末款一ヶ年已前ニ嫁シタル者タルヘシノ次へ(恒戰死或ハ傷痍ノ原因ニ由テ死ニ至ル軍人ノ寡婦ハ嫁時ノ

第二類 陸軍省



年月ニ關セス死傷前ニト加フ  
婚配セルモノタルヘシト加フ

一 同第十八條凡ソ養子ハノ次ヘ(其軍人生前ノ養子ニ)テノ文字ヲ加ヘ若シノ次(其軍人生前ニ)ノ文字ヲ刪除ス

一 同第三十六條(教導團生徒)及ヒ(下士)ノ文字ヲ刪除ス

一 同第三十七條(其他)ノ上ヘ(教導團生徒ハ其入團ノ日ヨリ)ノ十三字ヲ加フ

一 同第四十一條六ヶ月ノ次(十五日)及ヒ未文(例ヘハ云々以下)ノ四十字ヲ刪除ス

一 同第五十四條檢査口供ヲ作ルヘシノ次ヘ(但初メノ診斷證書陸軍病院長ノ證書ナレハ此ハ作ル)ト加フ

一 同第五十五條第六十六條(診斷書)ヲ(診斷證書)ニ改ム

一 同第五十六條末款口供書ヲ作リノ次ヘ(但初メノ診斷證書陸軍病院長ノ證書ナレハ此口供書ヲ作ルニ不及環取診斷證書ノミ作ル可シト加フ

一 同第七十條後見人一名ノ次(又ハ)ヲ(及ヒ)ニ改ム

一 同第七十一條(婚姻届書)ヲ(婚姻證書)ニ改メ(若シ云々以下)ノ四十字ヲ刪除ス

一 同第七十二條服役明細書ノ次ヘ(婚姻證書)ノ文字ヲ加フ

一 同第八十一條凡ソ恩給ノ次(扶助料)ノ文字ヲ刪除ス

一 恩給并扶助料表面罷役恤金ノ區畫中公務中ノ上ヘ(疾病若クハ)ノ文字ヲ加フ

恩給令附録追加

第六條 停年或ハ傷痍疾病ニ因リ恩給ヲ受ケタル者爾後再ヒ軍役ニ復シ又ハ文官ノ職ニ就クキハ其時日間其恩給ヲ停止スヘシ依テ就職ノ者ハ拜命ノ都度其本籍ノ管轄廳ニ届出管轄廳ハ之ヲ内務省ヘ届出可シ

但明治八年(四月)第四十八號達武官傷痍扶助料概則ニ從ヒ終身扶助料ヲ受ケタル者又

ハ明治二年ヨリ八年ニ至ル迄一等傷痍甲症ニ因リ終身一人半口二等傷痍乙症ニ因リ一

人口給與ノモノモ總テ本條ニ照シ處分スヘシ

第二百三 明治十三年一月十二日達

第貳號 官省院使府縣

明治九年(十月)第九拾九號達陸軍恩給令第十八條并第二十八條左ノ通改正候條此旨相達候事

第十八條 凡ソ養子ハ其軍人ノ下(生)ノ一字ヲ刪除シ(死傷)ノ二字ヲ加フ

第二十八條 其他軍人ハ一定ノ年齢ニ至リタル時其服役ヲ辭シテ致仕スルヲ例トス其年齡定限ハ左ノ如シ

會計監督 軍醫監 藥劑官 六十

參謀大中佐 會計副監督 軍醫正

第二類 陸軍省

本文中藥劑官  
ハ藥劑監ノ職  
ノ旨同月十六  
日太政官書記  
官ヨリ通達ア



本支中藥劑生  
ハ藥劑正ノ誤  
ノ旨同月十六  
日太政官專配  
官ヨリ通達了

第十四年第五  
十號公達ヲ以  
テ年齡定限ヲ  
改定ス

藥劑生	馬醫監	參謀少佐	五十七
憲歩騎砲工輜重兵大中佐			
會計監督補	會計軍吏	軍醫	五十四
劑官	馬醫		
憲歩騎砲工輜重兵少佐		參謀大尉	
會計軍吏副	軍醫副	劑官副	五十一
馬醫副	砲工兵上等監護		
憲歩騎砲工輜重兵大尉		參謀中尉	
會計軍吏補	軍醫補	劑官補	四十八
馬醫補	藥長	砲工兵監護	
砲兵監守	砲兵監查	火工教頭	四十五
諸工長	諸工下長		
憲歩騎砲工輜重兵中少尉		會計書記	
監獄	看病人	馬醫生	
樂次長	樂師	樂手	

會計卒 看病卒 樂正 四十  
諸兵下士 諸兵卒 三十五

第二百四 明治十三年一月十六日太政官書記官通達

本年(本月)第貳號達陸軍恩給令第二十八條年齡定限第一行中

藥劑官ハ 藥劑監ノ誤

全第三行中

藥劑生ハ 藥劑正ノ誤

第二百五 明治十三年四月八日達

第貳拾六號

官省院使府縣

明治九年(十月)第九拾九號達陸軍恩給令第七拾六條恩給計算書ノ儀大藏卿ニ移シ點檢セシ  
メ來リ候處自今會計檢査院ニ付シ候條此旨相達候事

第二百六 明治十三年四月二十九日陸軍省達

達甲第十二號

府 縣

歸郷負傷者傷痕恩給願書差出シ免官免役後傷所再感之者取扱方之儀ニ付別紙之通各領臺へ  
相達候條此旨相心得現今傷痕第四項以上之者ハ豫テ爲相心得置可申此旨相達候事

別紙



歸郷負傷者傷痕恩給證書進達既ニ現役ヲ離レシ日ヨリ恩給令第六十二條末款ノ年限内ニ傷所再感ノ者有之キハ其事實取調相違無之ニ於テハ本人ノ情願ニ任セ其郷里ノ最寄鎮臺病院ヘ入院爲致治療差許藥價食料官費ニ相立可申尤郷里ニ於テノ藥價診察料並郷里ヨリ病院ニ至ルノ旅費ハ總テ自辨爲致候儀ト可相心得此旨相達候事

但免官免役後郷里ニ於テ療養之儀豫テ開屆濟之分ハ本條之趣本人ヘ相達候日迄藥價診察料トモ可下渡事

第二百七 明治十二年三月二日內務大藏兩省達

乙第拾四號

府 縣

明治八年第四拾八號公達陸軍武官傷痕扶助等ノ概則御發行以前ニ係ル平常屯營ノ下士兵卒傷痕ノ者終身扶助米(壹人口又ハ半人口)代支給期節等ノ儀從前各廳ノ慣例ニ因リ或ハ區々ニ涉リ候向モ有之候處自今右四十八號概則第二條ニ照準シ毎年六月十二月兩度ニ割合(醫ヘハ某年一月ヨリ六月迄ノ分ヲ其六月ニ七月ヨリ十二月迄ノ分ヲ其十二月ニ取東子)支給候儀ト可心得此旨相達候事

但各廳ノ稟議ニ仍リ既ニ指令セシモノト雖モ本文ニ牴觸スルアラハ更正ノ儀ト可心得且該費ハ現今勘定帳編成方軍人恩給ノ科目ヘ編入スト雖モ來十三年度以降ニ於テハ十二年

(十二月)第五拾號公達所屬科目表(府縣所管經費)中恩賜費(小科目)ノ死傷手當(細科目)ヘ編入可致候事

第二百八 明治十二年四月十四日陸軍省達

達乙第三十三號

精勤證書附與概則別紙之通相定候條此旨相達候事

別紙

精勤證書附與概則

第一條 精勤證書ハ常備軍下士及ヒ兵卒在役中行狀方正ニシテ技藝ニ熟達シ殊ニ勤務ニ勉勵セシ者ニ限リ自己ノ名譽ヲ表スル爲メ各自服役滿期ノ節之ヲ附與ス可キ者トス

但兵卒服役ニケ年以上ニシテ常備歸休ヲ命セラル、者ハ出營ノ時本條ニ準シ之ヲ附與ス

第二條 下士及ヒ兵卒中再役ニ服シ其行狀方正ニシテ技藝ニ熟達シ殊ニ勤務ニ勉勵セシ者ハ再服役滿期ノ節更ニ精勤證書ヲ附與スヘシ

第三條 精勤證書ハ其聯隊聯隊ヲナサハル隊ニ在テハ大隊又ニ於テ日晝點呼ノ時兵隊整列ハ中小隊以下聯隊トアル者皆倣之ノ前ニ於テ之ヲ當該人ニ附與スルヲ法トス故ニ聯隊ニ於テハ豫シメ當該人ノ服役滿期ニ先チ其人名ヲ調査シ近衛ハ都督鎮臺ハ司令官ヘ申告シ許可ヲ受クヘシ

第二類 陸軍省



第四條 精勤證書ハ雛形ニ照シ近衛或ハ鎮臺ニ於テ調製シ之ヲ附與スヘキ人員ニ應シ其聯隊ニ配附スヘシ

第五條 前條證書ハ鳥ノ子紙ヲ用ヒ上木ノ時府縣郡區町村戸主名並ニ隊號年月日姓名番號等ハ省々置其時々聯隊ニ於テ加書スヘシ

第六條 精勤證書ヲ附與セシ者ハ各自所持スル所ノ手帖中精勤證書ノ區畫ニ其趣ヲ記載ス可シ

雛形

第 號

七寸 八分  
五寸 六分

精勤證書

何府(縣)何郡(區)何町(村)戸主名何男(兄)弟(伯)叔(甥)(附籍)

近衛 何兵第何聯隊第何大隊第何中隊

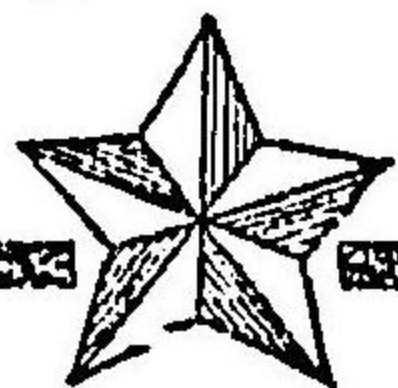
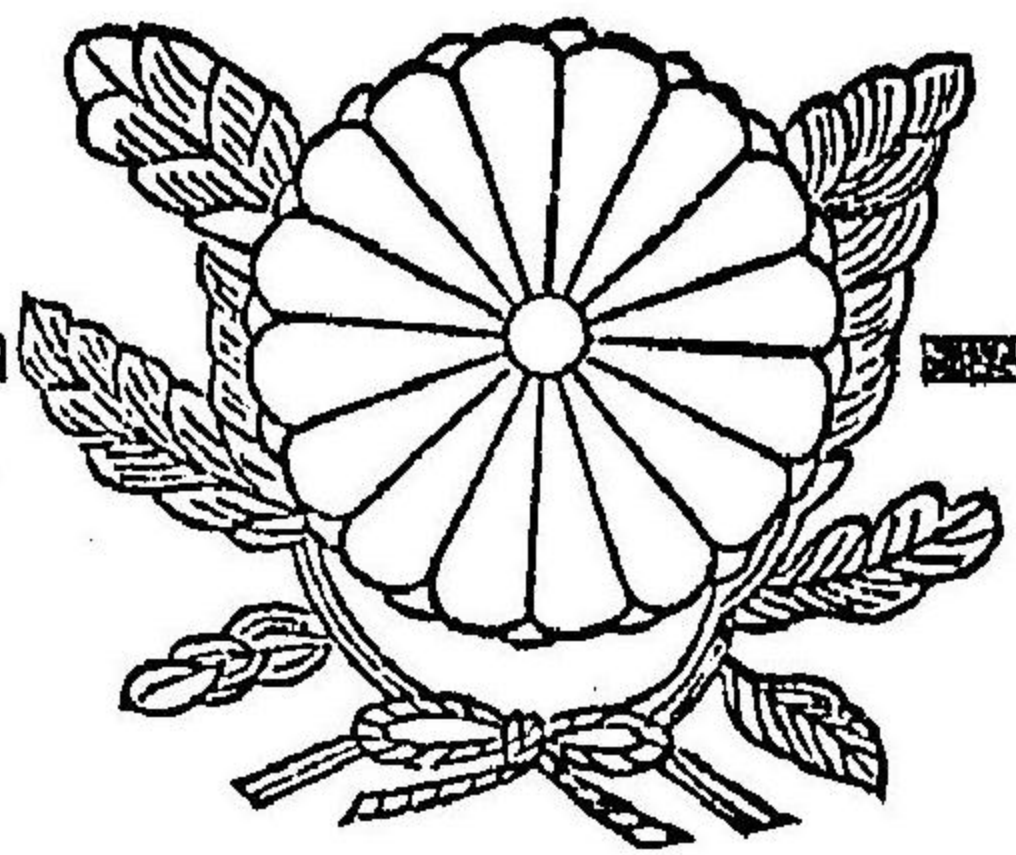
一 尺  
八寸二分

年月日 入營(再役) 官(何等兵卒) 勳何等 姓 名  
年月日 滿期(歸休)

右常備服役中行狀方正ニシテ

技藝ニ熟達シ殊ニ勤務ニ勉勵

セシヲ證スル者也



朱印

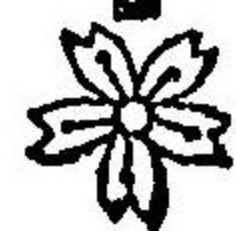
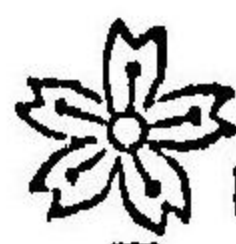
近衛或

ハ鎮臺月 日

之印

何兵第何聯隊(第何大)(中)(小)隊(聯)(大)(中)(小)隊長  
官位勳姓名印





第二百九

明治十二年四月十六日陸軍省達

近衛局 各鎮臺 士官學校 教導團

今般達乙第三十三號ヲ以テ精勤證書附與概則相定候ニ付テハ右精勤證書へ捺印所用ノ各隊長職印別紙雛形之通相定候條各所管ニ於テ調製可致此旨相達候事

別紙雛形

步兵第一  
聯隊長 九曲尺  
何ノ誰印

朱字字體楷書他ハ之ニ準ス但近衛隊ハ隊名ノ上ニ近衛ノ二字ヲ置クヘシ

海軍省

第二百十

明治九年九月三十日達

第九拾五號

海軍省職制章程別冊ノ通被定候條此旨相達候事

院省使廳府縣

別冊

海軍省

其省職制章程別冊ノ通被定候條此旨相達候事

右大臣岩倉具視

明治九年八月三十一日

海軍職制及事務章程

此編第一章ニ條列スル處ハ省内職務ノ制ニシテ第二章ハ奏請ヲ輕テ施行スル者ト海軍卿ノ專決施行スルモノトノ分ヲ明ラカニス

第一章

第一條 海軍省ハ海軍戰艦ニ關スル一切ノ事務ヲ管理スルノ所トス

第二條 省務ヲ支分シテ六局ヲ置キ卿之ヲ統轄ス左ノ如シ

- 軍務局 會計局
- 主船局 水路局
- 醫務局 兵器局

第二類 海軍省

爾十四年第四  
以十八號公達ヲ  
置ク同年丙第  
三十三號省達  
ヲ以テ改局ニ  
軍務局ノ次ニ  
列ス

爾十三年第六  
十號公達ヲ以  
テ首項删除



第三條 卿ノ職ハ海軍所管ノ軍人軍屬ヲ統率シ一切ノ事務ヲ總判スルヲ掌ル

第四條 凡掌管ノ事務ニ於テハ太政大臣ニ對シ其當否便不便ヲ辨明スルヲ得而シテ亦擔保ノ責ニ任ス

第五條 凡制可ヲ乞フヘキ條款ハ之ヲ上奏シ專決ヲ得ルモノハ便宜處分スルノ權ヲ有ス

第六條 各所管長ヨリ具狀スルモノハ其緩急ヲ量リ便否ヲ審案シ先後取捨スルノ權ヲ有ス

第七條 海軍文武官員奏任官以上ノ進退ハ太政官ニ於テ命スト雖其勸怠ヲ監察シ能否ヲ甄別シ黜陟ヲ具狀スルハ卿ノ任トス

第八條 判任官以下ハ其所管長ノ具狀ニ由テ黜陟ヲナスノ權ヲ有ス

第九條 元老院ノ會議ニ出席シ海軍事務ニ關スルモノハ其利害ヲ辨論スルヲ得

第十條 卿欠席スルトキハ輔官ニ命シテ當務ヲ代理セシム

第十一條 大輔ハ職掌卿ニ亞キ卿ヲ輔ケテ其事務ヲ調理ス

第十二條 卿ヨリ代理ヲ命セラルヘキハ一切ノ事務ヲ總理シ卿ノ意ヲ體シ區處スルヲ許ス

第十三條 省中管掌ノ事務ニ於テハ卿ト同ク參朝シテ便否ヲ辨明スルヲ得其元老院へ出席スルモ亦卿ニ準ス

第十四條 少輔ノ職掌大輔ニ亞ク大輔欠レハ少輔卿ノ代理ニ任スルヲ得其他皆大輔ニ同シ

第十三條第六  
十號公達ヲ以  
テ第十八條ヲ  
追加ス

同達ヲ以テ  
第二章ヲ悉皆  
改正ス

第十五條 將輔大佐大丞ノ内三名ヲ撰ミ長官ノ副官トシ省務ヲ三分シ之ヲ分掌セシム

第十六條 副官其分掌スル事務ニ於テハ卿ニ對シ擔保ノ責ニ任ス

第十七條 文武四等官以下ノ官員若干名ヲ撰ミ長官ニ係ル一切ノ事務ヲ分課處辨セシム

第二章

第十八條 出師ノ事

第十九條 海軍ノ配備編制ノ法ヲ定メ或ハ之ヲ増減改正スル事

第二十條 海軍ノ諸規則諸徽章及刑律罰例等ヲ増減改定スル事

第二十一條 武官俸給旅費ヲ増減スル事

第二十二條 退隱令及下士兵家族扶助金ノ規程ヲ改正スル事

第二十三條 文武官員及學生ヲ海外へ派出スル事

第二十四條 艦船等ノ製造ヲ外國へ托シ之カ條約ヲ定ムル事

第二十五條 兵營訓練場及工場諸廠舎ノ地ヲ撰定スル事

第二十六條 艦船ヲ外國へ廻航セシムル事

第二十七條 既定ノ費額ヲ變更シ及額外ノ經費ヲ要スル事

第二十八條 軍人軍屬ノ賞典及特赦ノ事

第二十九條 士官閉門以下ヲ除クノ外將校軍法ヲ犯ス者ヲ論決スル事



- 第三十條 下士以下軍律ニ於テ死罪ニ抵ル者ヲ處決スル事
- 第三十一條 本省ノ職制章程ヲ改革シ及局所府等ヲ廢置スル事
- 第三十二條 奏任官以上ノ任免ノ事
- 第三十三條 將官ニ職課ヲ命スル事
- 第三十四條 軍人軍屬ノ外國人ニ關スル刑法裁判ノ事
- 第三十八條 ヨリ本條ニ至ル迄ハ皆奏請シ制可ヲ得テ施行スルコトヲ得但シ其利害ヲ上陳シ意見ヲ建白スルハ海軍卿ノ任タリ
- 第三十五條 成規ニ照シ兵夫ヲ徵募スル事
- 第三十六條 掌管ノ事務ニ付府縣ヘ布達スル事
- 第三十七條 艦船ヲ内地各所ニ廻航セシムル事
- 第三十八條 外國人ヲ傭入レ及給金ヲ増減スル事
- 第三十九條 諸器械銃砲彈藥其他一切ノ兵器ヲ製造修理買辦スル事
- 第四十條 造船所兵營病院其他各官舎ヲ修理建築スル事
- 第四十一條 銅鐵諸材帆綱等一切海軍必用ノ物品ヲ買辦修理製造配布スル事
- 第四十二條 文武奏任官以下ノ官員ヲ各地方ヘ派出スル事
- 第四十三條 士官降官以上並下士以下死罪ヲ除クノ外軍法ノ諸犯ヲ處決スル事

- 第四十四條 内外人ノ需ニ應シテ艦船ヲ製造修補スル事
- 第四十五條 海軍生徒ノ撰入考課ノ方法ヲ定ムル事
- 第四十六條 掌管ノ事務ニ付内外人ヘ通信スル事
- 第四十七條 省中ノ事務他官省ニ交渉スル者ハ其官省ニ照會シテ執行スル事
- 第四十八條 奏任官ニ職課ヲ命シ判任官以下任免ノ事
- 第四十九條 省中諸課ヲ興廢スル事
- 第五十條 省中局所府等ノ章程ヲ定メ或ハ之ヲ改正スル事
- 第五十一條 海軍一切ノ事務ニ付其要旨ヲ記載シ每歲上呈スル事
- 第三十五條以下ハ海軍卿委任ノ權ヲ以テ之ヲ判決施行スルヲ許ル

第二百十一 明治十一年二月廿五日海軍省布達

甲第壹號

明治九年九月當省職制章程被相定候ニ付テハ從前諸寮司及部府等ニ係ル事務ハ左之諸廳ニ於テ掌管候條此旨布達候事

- 舊主船寮ノ事務ハ 造船所及主船局ニ於テ之ヲ管ス
- 舊水路寮ノ事務ハ 水路局 舊兵學寮ノ事務ハ 兵學校 舊軍醫寮ノ事務ハ 醫務局
- 舊武庫司ノ事務ハ 兵器局 舊水兵本部ノ事務ハ 鎮守府



但下士以下徵募及家族扶助金其他履歷ニ關スル事務ハ分テ軍務局ノ所管トス

第二百十二 明治九年九月一日海軍省達

丙第一號

海軍假條例今般別冊之通假定候條此旨相達候事別冊之

第二百十三 明治九年九月九日海軍省達

丙第十號

海軍假條例中第十九條別紙之通追加並第十六條正誤候條此旨相達候事

別紙

海軍假條例

第十九條追加

各局諸廳申出モノ其各局諸廳ノ章程下款ニ係ル者ハ本省へ不申出直ニ主務ノ廳へ照會シ物品金額トモ一切相辨シ可申其上款ニ該ル者ハ本省へ申出ノ前必ス主務ノ廳へ照會シ熟識ノ上其趣掲載申出ッ可シ

同例中第十六條正誤

第十六條中第十九條第二十條第二十一條ノ事項云々ハ第十三條第十四條第十五條ノ誤

第二百十四 明治九年九月一日海軍省達

丙第三號

本省三課六局及ヒ諸廳ノ事務章程今般別冊之通假定候條此旨爲心得回達候事別冊之略

第二百十五 明治十年十一月二日海軍省達

丙第二百十號

各局諸廳事務章程中別紙ノ通取捨改正候條此旨爲心得相達候事

別紙

横須賀造船所事務章程上款へ増加

一官林ノ樹木ヲ請求シ新艦材伐採ニ着手スル事

同第二十一條改正

一 等外吏以上ヲ黜陟賞罰スル事

同下款へ増加

一 艦材伐採ニ關スル諸職工雇入其需用品ノ購求等ヲ處斷スル事

同第三十六條改正

一 委任官以下ヲ五十里以内ノ地へ派出セシメ及等外吏相當以下ヲ其以外へ派出セシムル事

兵學校事務章程第一章第八條ノ次へ左ノ二條増加

一次官ハ佐官ヨリ之ニ任ス

第二類 海軍省



但六等官以上ノ文官ヲ以任スル事モアルヘシ

一其次長ハ職掌長ニ亞キ長事故アルトハ其事務ヲ代理ス

一第十三條刪除

各局事務章程中

一上款第四十條下款第五十一條刪除

第二百十六 明治十年十一月三十日海軍省達

丙第百三十五號

長崎出張所職制並事務章程中左之通追加改正候條此旨相達候事

第五條追加

但附屬川使以下ハ之ヲ黜陟進退スルノ權ヲ有ス

第九條改正

一給料十圓以下ノ附屬及川使以下ヲ昇降轉免スル事

第二百十七 明治十年十二月十九日海軍省達

丙第百四十二號

東海鎮守府事務章程中下款ノ第四十一條別紙之通追加候條此旨爲心得相達候事

別紙

第四十一條 給料二十圓以下ノ雇及川使以下ヲ黜陟進退スル事

第二百十八 明治十年十二月廿一日海軍省達

丙第百四十六號

各局事務章程主船局第一項中及以下消防之三字削除候條此旨爲心得相達候事

第二百十九 明治十一年一月十八日海軍省達

丙第十一號

海軍省各局事務章程中主船局之部第貳項機關科以下二十字刪除候條此旨相達候事

第二百二十 明治十一年一月廿一日海軍省屆書

兼而御届仕置候當省所轄各局及諸廳之事務章程中別紙之通改正致候條此旨御届仕候也

別紙

海軍省各局事務章程中

一上款四十條下款五十一條刪除

一會計局中用度課ヲ廢ス

一主船局ノ部

一第一項中及以下消防之三字刪除

一第二項中機關科以下二十字刪除



- 一 艦材課ヲ廢シ倉庫課ヲ置シ
- 海軍鎮守府同
- 一下款へ左之通増加
- 第四拾一條 給料貳拾圓以下ノ雇及用使以下ヲ黜陟進退スル事
- 海軍造船所同
- 一上款第二十一條左之通改正
- 等外吏以上ヲ黜陟賞罰スル事
- 一下款第三十六條左之通改正
- 奏任官以下ヲ五十里以内ノ地へ派出セシメ及等外吏相當以下ヲ其以外へ派出セシムル事
- 一上款へ左之通増加
- 官林ノ樹木ヲ請求シ新艦材伐採ニ着手スル事
- 一下款へ左之通増加
- 艦材伐採ニ關スル諸職工雇入其需用品ノ購求等ヲ處斷スル事
- 一調度課 營繕課 警査課ヲ廢シ更ニ 基整課 建築課 艦材課ヲ置シ
- 海軍兵學校同
- 一第一章第八條ノ次へ左ノ貳條増加

- 一 次長ハ佐官ヨリ之ニ任ス
- 但六等官以上ノ文官ヲ以任スル事モアルヘシ
- 一 其次長ハ職掌長ニ亞キ長事故アルレハ其事務ヲ代理ス
- 一 第十三條 刪除
- 海軍本病院同
- 一 藥劑課ヲ置シ
- 長崎海軍出張所假事務章程中
- 一 第五條へ但書左ノ通追加
- 但附屬用使以下ハ之ヲ黜陟進退スルノ權ヲ有ス
- 一 第九條左ノ通改正
- 第九條 給料十圓以下ノ附屬及用使以下ヲ昇降轉免スル事
- 第二百二十一 明治十一年六月二十四日海軍省達
- 丙第八十九號
- 主船局并造船所事務章程中別紙ノ通改正及増加候條爲心得此旨相違候事
- 別紙
- 主船局章程第一第二ノ兩條ヲ改正及ヒ第三條ヲ増加スルノ左ノ通



第一 艦船機關船具ノ製造修理機裝等ニ關スル一切ノ事務ヲ監査ス

第二 本省所管ノ地所ヲ管シ東京府下ニアル各廳建物大小修築ノ事業ヲ統管シ及府外各所營繕ノ事務ヲ監査シ其入費ヲ整理所辨ス

第三 各廳艦船需用ノ器具物品書籍石炭ヲ買辨貯蓄配付シ其諸費用ヲ管理ス  
造船所章程第五條ヲ改正スルヲ左ノ通

第五 港内碇泊場ヲ指揮シ及機裝修理製造ノ海軍艦船ヲ統轄シ且本省所管横須賀浦賀等ニアル諸廠舎一切ノ營繕及ヒ横濱東海鎮守府新築改造等ノ事ヲ管理ス

第二百二十二 明治十一年二月五日海軍省達

丙第二十四號

鹿兒島造船所之儀自今長崎出張所所轄ニ被定候條此旨爲心得相達候事

第二百二十三 明治十一年六月廿九日海軍省達

丙第九十二號

明治九年九月丙第一號ヲ以テ相達置候海軍假條例へ別紙ノ通追加候條此旨相達候事

別紙

海軍假條例追加

第二十條



明治九年八月第十三號布告改正

海軍文武官官等表

官 武						官 文			
機關科	主計科	秘書科	軍醫科	軍藥科	海兵部	裁判所	本省		
							大將	中將	少將
						將	一等	二等	三等
						官	四等	五等	六等
機關大監	主計大監	大秘書	大醫監			上長	按監	大丞	大丞
機關中監	主計中監	中秘書	中醫監			官	大匠司	少丞	中匠司
機關少監	主計少監	少秘書	少醫監			官	評事		







十年十五號達  
ヲ以テ技術官  
并技判所官等  
ヲ改ム

三課及ヒ局府所校ヨリ進達スル諸公文并ニ後證トナルヘキ文書ニハ必ス該長ノ印ヲ捺ス  
ヘシ該長不在或ハ事故アリテ副長次長其事務ヲ代理スルキハ副長次長ノ印ヲ捺スヘシ長  
及ヒ副長次長共不在或ハ事故アリテ其事務ヲ代理スル者ハ自己ノ印ヲ捺スモノトス

第二百二十四

明治九年八月三十一日布告

第一百十三號

海軍文武官等表別紙ノ通改正候條此旨布告候事

別紙

第二百二十五

明治九年九月一日海軍省達

横須賀

造船所

今般當省文武官等表御改正ニ付自今其所中ニ別紙甲乙丙表之通職名相設候條此旨相達候事  
別紙

第二類 海軍省

二百八十二



甲			
等	級	等外一等相當	等外二等相當
職名	一等業生	二等業生	三等業生
上等月俸	拾圓	八圓	六圓
下等月俸	九圓	七圓	五圓
職名	四等業生	三等業生	二等業生
上等月俸	四圓	六圓	八圓
下等月俸	三圓	五圓	七圓

加俸ハ技術官ト同ク適宜ニ支給ス

乙			
等	級	等外一等相當	等外二等相當
職名	一等工手	二等工手	三等工手
上等月俸	拾圓	八圓	六圓
下等月俸	九圓	七圓	五圓
職名	四等工手	三等工手	二等工手
上等月俸	四圓	六圓	八圓
下等月俸	三圓	五圓	七圓

加俸ハ技術官ト同ク適宜ニ支給ス

丙			
等	級	等外一等相當	等外二等相當
職名	一等巡吏	二等巡吏	三等巡吏
上等月俸	拾圓	八圓	六圓
下等月俸	九圓	七圓	五圓
職名	四等巡吏	三等巡吏	二等巡吏
上等月俸	四圓	六圓	八圓
下等月俸	三圓	五圓	七圓

上等月俸	拾圓
下等月俸	九圓
上等月俸	八圓
下等月俸	七圓
上等月俸	六圓
下等月俸	五圓
上等月俸	四圓
下等月俸	三圓

加俸ハ技術官加俸八拾三級ヨリ百三拾級マテノ内適宜ニ支給ス

第二百二十六 明治十一年二月十九日達

第五號

官院省使府縣

海軍文武官官等表中海兵部被廢候條此旨相達候事

第二百二十七 明治九年九月九日海軍省達

鹿兒嶋

造船所

其所中ニ別紙之通職名相設候條此旨相達候事

別紙

等	級	等外一等相當	等外二等相當	等外三等相當	等外四等相當
職名	一等工手	二等工手	三等工手	四等工手	
上等月俸	拾圓	八圓	六圓	四圓	

第二類 海軍省



加俸ハ技術官ト同ク適宜ニ支給ス

第二百二十八 明治十年四月五日海軍省達

丙第四十八號

海軍下士以下黜陟進退及艦船乘退其他各身上ニ係ル諸何届並報告等従前區々ニテ不都合候ニ付自今左之通假定候條此旨相違候事

但左之條款ニ遺漏ノ分ト雖ヒ其事件緊要ニ屬スルハ總テ届出ノ上關係ノ向ヘ報告候儀ト可相心得候事

第一條 鎮守府ニ於テ所轄ノ下士ヲ黜陟スル時ハ本省ヘ届出且軍務局ヘ報告シ其一等卒以下ニ在テハ特ニ軍務局ニノミ報告ス可シ

第二條 同府ノ外他ノ諸廳ニ於テ所轄下士ノ黜陟ヲ要スル時ハ鎮守府ヘ協議ノ上本省ニ具狀スヘシ

但一等卒以下ハ鎮守府ヘ協議ノ上所轄廳限リ之ヲ黜陟シ軍務局及鎮守府ヘ報告スヘシ  
第三條 下士以下艦船乘退及轉乘其他病院出入等ノ時ハ所轄廳ヨリ軍務局及鎮守府ヘ報告スヘシ

第四條 下士以下戰死横死及下士病死ノ時ハ其事由詳細所轄廳ヨリ本省ヘ届出且軍務局及鎮守府ヘ報告スヘシ

但一等卒以下ノ病死ハ直チニ軍務局及鎮守府ニ報告ス可シ  
第五條 下士以下犯罪ノ者之レ有ル時ハ其事由詳細本省ヘ申出但脱走ノ者ハ可シ  
人相違ヲ添

但脱走兇暴等ノ類難捨置分ハ直チニ裁判所ヘモ委詳通知ス可シ  
第六條 裁判所ニ於テ下士以下犯罪者ヲ拘留スル時ハ該所ヨリ軍務局及本人ノ所轄廳ヘ報告スヘシ

第七條 下士以下懲罰ニ處スル時ハ其罰文相添所轄廳ヨリ每歲二期六月  
十二月取束テ本省ヘ届出可シ尤軍務局鎮守府及裁判所ヘハ其時々報告罰文  
添ス可シ

第八條 裁判所ニ於テ下士以下處刑宣告濟ノ時ハ本省ヘ届出且軍務局鎮守府及本人ノ所轄廳ヘ報告罰文  
添ス可シ

第九條 艦船定員ノ下士以下裁判所拘留中乗組ヲ免スル時ハ所轄廳ヨリ其旨該所ヘ報告ス可シ

第十條 艦内割烹介以下所轄限リ備役ノ者備入ノ時ハ該廳ヨリ軍務局ニ報告ス可シ  
第十一條 軍樂隊下士以下及看病夫長以下ハ前數條ノ限リニ非スト雖モ其身上ニ係ル事件ニ付本省ヘノ届及軍務局裁判所ヘノ報告ハ又前各條ニ照準ス可シ



第二百二十九 明治十年七月三日海軍省達

東海鎮守府

其府所轄橫須賀水兵屯集所下士以下定員之儀別紙之通相定候條此旨相達候事

別紙

屯集所下士以下定員

一艦内教授役	三人	一筆記	二人	一掌砲長	一人
一水兵長	二人	一木工長	一人	一機關士補	四人
一艦内教授役介	三人	一警吏	三人	一水兵次長	二人
一甲板長	一人	一接針長	一人	一木工次長	一人
一鍛冶長	一人	一廚宰	二人	一火夫長	一人
一端舟長	四人	一掌砲長屬	二人	一水兵長屬	二人
一甲板次長	一人	一橋樓長	一人	一木工長屬	二人
一割烹	二人	一火夫次長	一人	一甲板長屬	二人
一橋樓長屬	三人	一警吏補	三人	一接針長屬	一人
一割烹介	四人	一火夫長屬	二人	一鍛冶長屬	一人
一廚宰介	六人	一喇叭手	六人	一壹等鍛冶	二人

增補

第二百三十一 明治十年十月三日海軍省達

府 縣

乙第八號

神奈川縣下相州三浦郡橫須賀へ東海水兵本營ヲ設置シ同縣下同郡浦賀水兵屯集所ヲ東海水兵分營ト改稱候條此旨相達候事

第二百三十一 明治十二年一月十八日海軍省達

丙第四號

東海鎮守府所轄東海水兵分營定員ノ儀自今別紙ノ通相定候條此旨爲心得相達候事

別紙

一同五等迄ノ内	四人	一壹等木工ヨリ五等迄之内	六人	一 一等水兵	十三人
一二等水兵	十四人	一三等同	十二人	一四等同	十三人
一守燈夫	五人	一割烹夫	廿五人	一剃夫	二人
一三佐從僕	二人	一士官從僕	六人	一裁縫手	二人
以上百七十四人					

少佐 <small>營長</small>	一名	大中尉ノ内 <small>内一名副長</small>	五名
少尉少尉補ノ内	八名	大中少尉ノ内 <small>教官事務</small>	一名
大中軍醫ノ内	一名	少軍醫	一名

第二類 海軍省

二百八十七



軍醫副	二名	大中主計ノ内	一名
少主計	一名	主計副	二名
大中機關士ノ内	一名	掌砲上長	一名
水兵上長	一名	木工上長	一名
掌砲長	一名	水兵長	一名
木工長	一名	艦内教授役或ハ介ノ内	四名
筆記	二名	警吏或ハ警吏補ノ内	四名
水兵次長	一名	甲板長或ハ長屬ノ内	四名
按針長或ハ長屬ノ内	二名	鍛冶長	一名
艦内廚宰	二名	檣樓長	一名
端舟長	一名	鍛冶次長或ハ長屬ノ内	一名
檣樓次長或長屬ノ内	三名	木工次長或ハ長屬ノ内	二名
掌砲長屬	一名	水兵長屬	三名
艦内割烹	二名	艦内廚宰介	三名
艦内割烹介	二名	一等水兵ヨリ 三等水兵迄 内二名喇 叭取務	卅二名
木工	六名	鍛冶	六名

帆縫手	二名	守燈夫	二名
割烹夫	十四名	佐官從僕	一名
士官室從僕	四名	削夫	二名
裁縫手	二名		
以上百四十八			

第二百三十一 明治八年八月廿四日達

第四百十八號

使 府 縣

海軍退隱令當分別冊ノ通相定候條右條款ニ照シ處分致スヘク此旨相達候事

別冊

海軍退隱令

第一條 退隱料 凡ソ海軍武官及ヒ乘艦官吏定限ノ在職年數ト年齢トニ由ルカ又ハ疾病等  
 ニテ引續キ將官ハ七年佐官以下ハ五年乘艦セシテ附録甲號第一表ヨリ第三表迄ニ掲ル  
 所ニ適合スル者ハ退隱ヲ命シ則其退隱料ヲ終身給シ及ヒ左ノ二項ニ適合スル者ハ在職年  
 數ト年齢トヲ問ハス之レ亦退隱ヲ命シ終身同表ニ掲ル所ノ退隱料ヲ給シ且第一項ニ適合  
 スル者ハ退隱料ノ外ニ終身十八條ニ載ル所ノ増額ヲ給與スヘシ

第一 戰鬪及ヒ公務ニ因テ傷痕ヲ得其職務ニ堪ヘサル者



第二 公務ニ因テ疾病ヲ得廢人トナリ及ヒ同シ因由ヲ以テ身體衰弱シ勤仕ニ堪ヘサル者

第二條 前條ノ官員在職年數年齢トモニ前條掲ル所ニ及ハサルモ疾病等ニ因テ退隱ヲ請フ  
キハ審査ノ上在職滿十一年以上ニシテ年齢ハ附録甲號第四表ヨリ第六表迄ニ適合スル者  
ハ本表ニ因リテ終身退隱料ヲ給シ且前條第一項及ヒ第二項ニ適合スル趣ヲ以テ出願スル  
者モ審査ノ上相違ナキニ於テハ年數年齢ヲ問ハス前條ノ如ク之レヲ處分スヘシ  
第三條 退隱願書ハ各其部ノ長官ニ出シ長官檢閱ノ上副書シテ海軍省ニ送リ卿審査ノ上之  
レヲ上請スヘシ

但シ本人願書ハ總テ醫官ノ證書ヲ副フヘシ此證書ハ海軍省へ止メ置上請ノトキ副フル  
ニ及ハス

第四條 平時戰時ヲ論セス退隱シタル者ト雖モ再ヒ勤仕ニ堪フヘキ者ハ或ハ之レヲ選用ス  
ヘシ同人再ヒ退隱スルモ其退隱料ヲ給スルコト勿論タルヘシ

第五條 將校及ヒ將校ト同級ナル官吏ノ退隱料ハ海軍省ヨリ内務省へ送致シ其他ハ總テ内  
務省ニ於テ別途ニ相立テ各府縣廳ヨリ毎年六月十二月兩度ニ本人へ交付スヘシ

第六條 退隱料ヲ受ケン者死亡セシキハ將校及ヒ將校ト同級ナル官吏ナレハ海軍省へ届出  
直テニ同省ヨリ上申シ其他ハ内務省へ届出同省ヨリ之レヲ上申シ且海軍省へ報知スヘシ

九年八月號達ヲ  
以テ第五條ヲ  
改正ス

第七條 他ノ官省ヨリ海軍ニ轉任スル者縱令海軍在職十一年ニ滿タスト雖モ前後ヲ合算シ  
テ第二條ノ在職年數ト年齢トニ適合スル者退職ヲ請フモハ詮議ノ上之レヲ命シ退隱料ヲ  
給スヘシ

第八條 海軍ヨリ他ノ官省ニ轉任スル者ハ已ニ海軍省ニ於テ十一年以上在職スト雖モ一切  
退隱料ヲ給セサルヘシ

第九條 退隱ノ者再ヒ勤仕シ後日退隱スルニ當リテハ其前後官等ノ内上等ナル官等ニ準シ  
退隱料ノ額ヲ定ムヘシ

第十條 此退隱料ヲ受ケン者海軍卿ノ許可ヲ經スシテ他ノ官省ニ奉任シ或ハ外國ニ渡航シ  
又ハ人ノ雇ニ應シ俸金等ヲ受ケンモハ退隱後トイヘモ其事海軍ノ規律ヲ犯スヲ以テ退隱  
料ノ給與ヲ止ルハ勿論且軍律ヲ以テ之レヲ所斷スヘシ

第十一條 在職年數ヲ算定スルハ明治四年八月ヲ以テ始トナス然レモ二年五月箱館平定以  
來引續キ勤仕スル下士以下ノ者ハ其時ヨリ之レヲ合算スルヲ得可シ

第十二條 在職年數ハ年齢十七ヲ以テ起算シ其前勤仕スル者アルモ之ヲ算入セス  
第十三條 俘虜中ノ年數モ平時勤仕ノ年數ト之レヲ合算スルヲ得ヘシ

但非役中ノ年數ハ之レヲ合算スルヲ得ス  
第十四條 軍艦ニ乗組外國ニ渡航ノ時間ハ一箇年ヲ平時勤仕ノ一ヶ年半ニ算シ又戰時乘組



ノ時間ハ戰闘ノ難易繁簡ニ據リ一ケ年ヲ平時勤仕ノ一ケ年半以上ヨリ三ケ年迄ニ算定スヘシ此時ニ於テハ卿ヨリ意見ヲ上申シテ裁決ヲ請フヘシ

但端月數ハ一年ニ付十二ケ月ノ比例ヲ以テ之レヲ定ムヘシ

第十五條 閉門禁錮及ヒ總テ懲罰ヲ受ケシ時間ハ相合シテ三ケ月ヲ一年一ケ月ヲ四ケ月ニ算シ在職年數中ヨリ之レヲ減却スヘシ「停官放逐ノ刑ニ處セラル、者ハ總テ退隱料ヲ給セサルヘシ

第十六條 本官在職十八ケ月以上ノ者ハ其官等ニ準シ十八ケ月未滿ノ者ハ前官相當ヲ以退隱料ヲ給スヘシ

但第一條第一項ニ當ル者ハ直ニ現在ノ官等ニ準シ之レヲ給スヘシ

第十七條 在職滿十一ケ年以下ノ者ハ退隱料ヲ給セス但文官一般ノ滿年賜金ハ之レヲ給與スヘシ

第十八條 帶傷扶助料 第一條第一項ノ者ハ退隱料ノ外ニ左ニ掲ケル比例ヲ以テ終身扶助料ヲ増給スヘシ此給與ノ手續キハ第五條ニ同シ

第一 戰闘ニ由テ兩肢或ハ兩眼ヲ失ヒシ者ニハ退隱料ノ十分ノ六

第二 前項ニ殆ト讓ラサル傷痕ヲ受ケシ者ニハ其十分ノ五

第三 戰闘ニアラサルモ前二項ニ均シキ傷痕ヲ受ケシ者ニハ其十分ノ四

第四 戰闘ニ由テ一肢或ハ一眼ヲ失ヒシ者ニハ其十分ノ三

第五 前項ニ殆ト讓ラサル傷痕ヲ受ケシ者ニハ其十分ノ二

第六 戰闘ニアラサルモ前二項ニ均シキ傷痕ヲ受ケシ者ニハ其十分ノ一

第十九條 戰闘及ヒ公務ニ由テ帶傷スルモ猶續キテ奉職シ後年退職スル者ハ其官等ニ準シテ退隱料ヲ給スル、外更ニ前條ノ扶助料ヲ増加スヘシ

第二十條 帶傷退隱ノ者再勤シ復退隱スルニ當リテハ第九條ニ準シテ退隱料ヲ給シ扶助料ハ前額ニ因テ之ヲ給ス

第二十一條 帶傷退隱ノ後當時ノ傷痕ニ根據シテ十二箇月間ニ重症ニ變スルモ直ニ海軍省ヘ届出ヘシ又各府縣下ニ居住スル者ハ其廳ヨリ左ノ書類ヲ添ヘテ同省ヘ届出ヘシ

第一 本人帶傷ノ土地年月日及ヒ是迄收受ノ扶助料年額

第二 變症ノ景況ヲ記シタル地方醫師ノ證書

右區戶長與印シ府縣廳之レニ捺印ス

同省審査ノ上相違ナキニ於テハ之レヲ上請シ扶助料ノ増加ヲ得セシムヘシ

第二十二條 總テ帶傷或ハ疾病ノ故ヲ以テ退隱出願ノ者ハ何レノ土地ヲ問ハズ海軍醫在住出張ノモハ其診察ニ依リ其他ハ前條第二項ニ掲ケル所ニ從ヒテ卿之レヲ審査シ上請允准ヲ請フヘシ



第廿三條 寡婦扶助料 總テ戰鬪ニ由テ死亡シ又ハ之レニ由テ十二ヶ月内ニ死亡シ又ハ公務ニ於テ死亡シ又ハ病氣等ニテ死亡シタル海軍武官及乘艦官吏ノ寡婦孤兒養子モ之レニハ本人死亡シタル時ノ官等ニ準シ扶助料ヲ年々給スヘシ

第廿四條 此扶助料ノ額ハ附録乙號ノ表中ニ掲ルカ如ク其死亡シタル次月ヨリ之レヲ給スヘシ

第廿五條 戰鬪及ヒ公務ニ由テ死亡スル者アレハ海軍省ヨリ直ニ本人居住ノ府縣廳ヘ報知シ其屬ヨリ左ノ證書ヲ出サシムヘシ

妻ノ存亡有無及ヒ現在實子養子出生ノ年月日ヲ記シタル書面  
但シ本人家ヲ出テシヨリ十箇月内ニ生シタル子ハ之レヲ記入スルヲ得

右區戸長與印シ府縣廳之レニ捺印ス

第廿六條 戰鬪及公務ニ因リテ帶傷シ各府縣下ニ居住シ十二ヶ月間ニ此因由ヲ以テ死亡セシ者ハ其屬ヨリ左ノ證書ヲ添ヘテ海軍省ニ届出ヘシ但ニ箇年ヲ經テ出願スル者ハ之レヲ受理セス

- 第一 本人帶傷ノ土地年月日及ヒ是迄收受ノ扶助料年額
- 第二 病中ノ景況ヲ記シタル地方醫師ノ證書
- 第三 第廿五條ト同様ノ書面

右何レモ區戸長與印シ府縣廳之レニ捺印ス

第廿七條 前二條ノ者アルハ海軍省ヨリ詳細之レヲ具狀シ寡婦扶助料給與ノ允准ヲ請フヘシ

第廿八條 寡婦扶助料ハ各府縣廳ニ於テ毎年六月十二月二度ニ割合ヒ之レヲ交付スヘシ但此金額ハ内務省ニ於テ別途ニ相立各府縣廳ヘ配賦スヘシ

第廿九條 死亡セシ者ノ妻再嫁スルカ死亡スルカ其月ヨリ此扶助料ヲ止ム但十七歲未滿ノ男子十八歲未滿ノ女子アルハ改メテ孤子扶助料ヲ給スヘシ

第三十條 寡婦後妻ニシテ前妻ノ子アルハ其子ノ多少ヲ論セス扶助料三分ノ一ヲ以テ之レニ分與スヘシ但其子ハ男子十七歲女子十八歲ニ至レハ其次子之レヲ受ケ悉皆同上ノ歳ニ至レハ寡婦其金額ヲ收受スヘシ

第三十一條 死亡スル者父母或ハ十七歲未滿ノ弟十八歲未滿ノ妹アリ此者ニ依テ生活シ外ニ養育スヘキ親戚ナク飢渴ニ及フヘキ者ハ府縣廳審查シテ海軍省ヘ届出ヘシ同省上申ノ上或ハ臨時ノ詮議ヲ以テ相當ノ扶助料ヲ給スヘシ

第三十二條 孤兒扶助料 海軍武官及ヒ乘艦官吏第二十二條ニ於ケルカ如キ故ヲ以テ死亡スル以前其妻既ニ死シ又ハ離婚シテ十七歲未滿ノ男滿十七歲以下トイヘ他ニ生計立ルハ之レヲ止ム十八歲未滿ノ女滿十八歲以下トイヘ他ニ婚嫁スレハ之レヲ止ムアルハ附録丙號ノ表中ニ掲ルカ如ク孤兒扶助料ヲ給ス可シ此給

九年八號達ヲ以テ第廿八條ヲ改正ス



與ノ手續ハ第廿八條ニ同シ

但其子本文ノ歳ニ至リタル後ハ次子ヘ次子本文ノ歳ニ至リタル後ハ三子ヘ給スル等之レヲ順及シ末子本文ノ歳ニ至レハ之レヲ止ム

第二十三條 賑恤金 第十八條ニ掲クル所ノ者ハ同條扶助料ノ外ニ一時賑恤金ヲ給ス其額ハ左ノ如ク其給與ノ手續ハ第廿八條ニ同シ

第一 第十八條ニ掲シ第一項ノ者ニハ年俸全額ヲ給ス

第二 同 第二項ノ者ニハ同十分ノ九ヲ給ス

第三 同 第三項ノ者ニハ同十分ノ八ヲ給ス

第四 同 第四項ノ者ニハ同十分ノ七ヲ給ス

第五 同 第五項ノ者ニハ同十分ノ六ヲ給ス

第六 同 第六項ノ者ニハ同半額ヲ給ス

外

第七 第六項ヨリ輕傷ヲ受ケ同十分ノ四ヨリヲ給ス  
シ者ニハ其輕重ニ準シ十分ノ一マテヲ給ス

第三十四條 第廿三條ニ掲クル所ノ寡婦孤兒ニハ其本人死亡シタル時ノ官等ニ準シ一時賑恤金ヲ給ス其額妻ヘハ年俸全額孤兒ニハ其人數ヲ問ハス年俸三分ノ一ヲ給ス可シ此給與ノ手續モ第廿八條ニ同シ

但孤兒年齡ハ第三十二條ノ如シ

附錄甲號第一表

附錄甲號第四表

海軍武官退隱料

同十一年以上在職遞減退隱料

官等	海軍武官退隱料			
	大將	中將	少將	大佐
	在職年數	在職年數	在職年數	在職年數
餘年職在	十六	十四	十二	十
料隱退	千六百	千四百	千二百	千
增加	二百	二百	二百	二百
在職年數	二十	二十	二十	二十
同十一年以上在職遞減退隱料	千四百	千二百	千	八百
	千二百	千	八百	六百
	千	八百	六百	四百
	八百	六百	四百	二百
	六百	四百	二百	一百
	四百	二百	一百	五十
	二百	一百	五十	二十
	一百	五十	二十	十
	五十	二十	十	五
	二十	十	五	二
	十	五	二	一







掌砲次長	水夫次長	指揮官	甲板長	按針長	信號長	帆纜長	造綱長	火夫次長
						五十四 一十二		
						九九五 六錢十圓十		
						○		
						○		
						○		
						○		
						九九五 六錢十圓十		
						三錢六 三十五		
						七六四 六錢十圓十		
						一四六 四錢十圓十		
						五錢六 三十三		
						九錢六 六十二		
						四三六 三十二		
						七錢六 三十一		
						錢七 六十四		
						五錢六 十圓		
						九錢五 三十九		

塗師	檣節師	木工長	中艦廚	鍛冶長	火夫長	木工次	肝煎介	宰大艦廚
	五十四 一十二				五十四 一十二			二錢
	五五八 六錢十圓十				錢十圓七 一八十八			
	○				○			
	○				○			
	○				○			
	○				○			
	五五八 六錢十圓十				錢十圓七 一八十八			二錢三錢
	六錢六 六十七				十錢七 十四			五錢六錢八錢
	錢十七六 八圓十				九三九 六錢十圓十			九錢
	九四六 六錢十圓十				九六八 六錢十圓十			錢
	一錢八 六十五				八錢六 九十七			錢
	錢四六 六十五				七圓六 二十七			三錢
	四錢六 四十四				六圓六 五十六			四錢
	五錢六 七十三				五圓六 八十五			錢
	四錢六 三十三				錢四六 十五			三錢
	四錢八 三十二				四圓六 四十四			四錢
	一錢六 七十一				三圓六 七十三			錢



長造綱次	長帆縫次	長信號次	長按針次	櫓樓長	長甲板次	長天端舟	舟長	艦長端	水夫長
			五十四						
			一十二						
			八五三六						
			錢十四十						
			○						
			○						
			○						
			○						
			八五三六						
			錢十四十						
			四十四六						
			錢九十二						
			一三二六						
			錢十六六						
			七十六六						
			錢十四六						
			四十四六						
			錢四十一						
			四十						
			錢七十						
			七十四						
			錢七十九						
			錢四十九						
			四十九						
			錢四十九						
			四十九						
			錢五十八						
			五十八						
			錢五十七						
			五十七						
			錢四十七						
			四十七						
			錢二十七						
			二十七						

屬營砲長	桶師	塗工	槓筋工	木工	宰病室廚	烹大艦割	兵器工	鍛冶
		五十四						
		一十二						
		五九三六						
		錢十四十						
		○						
		○						
		○						
		○						
		六十六三						
		三十四十一						
		九十四十一						
		五錢						
		六十六三						
		二四二四						
		六十三二						
		七錢						
		二四二四						
		九錢						
		錢						
		六十四						
		六十四						
		十一錢						
		七錢						
		四十九						
		五十九						
		四十九						
		五十八						
		五十八						
		四十九						
		五十八						
		五十七						
		五十七						
		六錢						



造綱手	帆縫手	長小端舟	水夫	宰小艦廚	火夫	桶工	屬造綱長	屬帆縫長
五十四								
一十二								
四六九五								
錢十圓十								
○								
○								
○								
○								
四六九五								
錢十圓十								
圓五十九								
錢四十九								
五十四八五								
錢十圓十								
五十八七五								
錢十圓十								
五圓五十七								
錢二十七								
六圓六十六								
錢六十六								
圓五十六								
錢五十六								
七圓四十五								
錢四十五								
七圓八十四								
錢八十四								
七圓五十四								
錢五十四								
八圓六十三								
錢六十三								

屬信號長	屬按針長	屬檣樓長	屬甲板長	長中端舟	砲夫	烹中艦割	屬火夫長	船艙長
五十四								
一十二								
錢十一六								
錢七圓十								
	ルヘ一十同者同 ヘ陽ヲ分クニ上 シハ加ノ五ハノ							
○								
○								
○								
○								
錢十一六								
錢七圓十								
錢五十六								
錢六圓								
五九九五								
錢十圓十								
五九三五								
錢十圓十								
五圓五十八								
錢七十八								
錢圓五十八								
錢十一十八								
錢圓五十七								
錢五十七								
九圓五十六								
錢八十六								
八圓五十六								
錢二十六								
六圓五十五								
錢六十五								
圓五十五								























大	機	主	少	權	少	機	主	中	秘	中	大	大
尉	關	計	醫	秘	佐	關	計	醫	書	佐	醫	佐
	少	少	監	書		大	大	監	官		監	
	監	監	二百四十圓	官				二百八十八圓			三百八十四圓	
			百六十圓					百九十二圓			二百五十六圓	
			百二十圓					百四十四圓			百九十二圓	
			八十圓					九十六圓			百二十八圓	
			五十三圓三錢					六十四圓			八十五圓三錢	
			十三錢					四十八圓			六十四圓	
			四十圓									

三百十六

大	大	大	中	中	中	中	中	大	大	大	大
秘	主	軍	軍	主	機	機	機	機	主	軍	軍
書	計	醫	醫	計	關	關	關	關	計	醫	醫
		二百二十圓	百八十圓							百六十圓	百六十圓
		百四十六圓	百二十圓							七錢	七錢
		百十圓	九十圓							八十圓	八十圓
		六十六圓六錢	六十四圓							五十三圓三錢	五十三圓三錢
		四十四圓四錢	四十二圓六錢							十五錢	十五錢
		三十三圓三錢	三十二圓							十六錢	十六錢

第二類 海軍省

三百十七



掌砲長	肝煎	艦內教授役介	機關士副	木工上長	水夫上長	掌砲上長	艦內教授役	主計副	軍醫副	秘書副	少機關士	少主計
八十三圓四			九十圓八十六錢		百圓四十錢				百二十圓八十錢			
五十五圓三			六十圓五十六錢		六十六圓九十三錢							
四十一圓五			四十五圓四十二錢		五十圓廿錢				六十圓			
四十一圓五			四十五圓四十二錢		五十圓				四十八圓三十二圓			
三十二圓一			三十三圓九十六錢		三十三圓三十三錢							
二十二圓五			二十二圓五		二十五圓				二十四圓			

水夫長	木工長	鍛冶長	筆生	鍛冶次長	大艦廚宰	肝煎介	木工次長	火夫長	鍛冶長屬	中艦廚宰	木工長屬	棋師
錢			六十九圓六十八錢				六十圓十六錢					
十六錢			四十六圓四十五錢				四十圓十一錢					
十二錢			三十四圓八十四錢				三十圓八錢					
十二錢			三十四圓八十四錢				三十圓八錢					
錢			二十八圓六十七錢				二十六圓二十九錢					
十錢			二十二圓五				二十二圓五					



塗師	掌砲次長	水夫次長	指揮官端舟長	甲板長	按針長	信號長	帆縫長	造網長	火夫次長	鍛冶	兵器工	大艦割烹

病室厨宰	木工	棋笥工	塗工	桶師	掌砲長屬	水夫長屬	艦長端舟長	大端舟長	甲板次長	檣樓長	按針次長	信號次長
						五十一圓七 十二錢	三十四圓四 十八錢					
						二十五圓八 十六錢						







大艦々長厨宰	大艦々長割烹	一等艦厨宰	一等艦割烹	厨宰介	割烹介	看病人介	裁縫手	造靴手	守燈夫	屠夫	剃夫	艦長割烹
									四十五圓			
									三十圓			
									二十二圓			
									五十二錢			

艦長割烹	士官室厨宰	士官室割烹	三佐從僕	秘書從僕	大少監從僕	割烹夫	造麩夫	看病人	士官室使丁	士官室從僕	士官次室使丁	士官次室厨宰



士官次室割烹									
中士室厨宰									
中士室割烹									
厨宰使丁									
曹長	六十九圓五	四十六圓三	三十四圓七	三十四圓七	二十八圓六	二十二圓五十			
樂隊長	十六錢	十七錢	十八錢	十八錢	十四錢	錢			
軍曹									
數長	六十九圓十	四十六圓十	三十四圓五	三十四圓五	二十八圓五	二十二圓五十			
樂長	八錢	二錢	十九錢	十九錢	十五錢	錢			
伍長									
鼓次長	六十八圓八	四十五圓八	三十四圓四	三十四圓四	二十八圓四	二十二圓五十			
樂師	十錢	十七錢	十錢	十錢	十五錢	錢			
卒	四十八圓	三十二圓	二十四圓	二十四圓	二十三圓二	二十五圓五十			

第二百二十三 明治九年一月二十九日達

第八號

使 府 縣

明治八年<sup>四</sup>第四十八號達陸軍武官傷痍扶助及ヒ死亡ノ者祭染并ニ其家族扶助概則及ヒ同月<sup>八</sup>第百四十八號達海軍退隱令中左ノ通改正候條此旨相達候事

陸軍武官傷痍扶助概則

第二條 第一項第二項第三項ノ扶助料云々

但將校終身ノ扶助料ハ陸軍省ヨリ内務省ヘ送り其他ハ總テ内務省ヨリ大藏省ヘ報知シ

大藏省ヨリ額外常費トシテ各府縣廳ヘ配賦スヘシ

第十三條 此家族ノ扶助料云々

但此金額ハ内務省ヨリ大藏省ヘ報知シ大藏省ヨリ額外常費トシテ各府縣廳ヘ配賦スヘシ

海軍退隱令

第五條 將校及將校ト同級ナル官吏ノ退隱料ハ海軍省ヨリ内務省ヘ送致シ其他ハ總テ内務

省ヨリ大藏省ヘ報知シ大藏省ヨリ額外常費トシテ各府縣廳ヘ配賦シテ毎年六月十二月兩

度ニ本人ヘ交付セシムヘシ

第廿八條 寡婦扶助料云々

第二類 海軍省

同年九十九號  
達ヲ以テ傷痍  
扶助概則ハ廢  
ス



但此金額ハ内務省ヨリ大藏省へ報知シ大藏省ヨリ額外常費トシテ各府縣廳へ配賦スヘシ

第二百二十四 明治八年九月十五日内務省達

乙第百十八號

今般第百四十八號海軍退隱令御定相成候ニ付左ノ條款當省へ可申出此旨相達候事

一 退隱令第五條軍人以下退隱料ノ件ハ毎年五月十一月限兩度ニ本人姓名年齢在職年數退

隱料員數等詳細記載請取方可申出事

一同第六條退隱料ヲ受シ者死亡ノ節ハ其旨速ニ可届出事

一同第廿八條寡婦扶助料ノ儀ハ其亡夫及ヒ寡婦ノ姓名扶助料員數共詳細記載毎年五月十

一月限兩度ニ請取方可申出事

第二百二十五 明治十二年一月廿二日達

第三號

使 府 縣

明治八年(八月)第百四拾八號達海軍退隱令中左ノ通被改候條此旨相達候事

一 第一條ノ第一項中(其)ノ字ヲ删除ス

一 第十八條ノ第四項中(或ハ一眼)ノ四字ヲ删除ス

一 第二十三條中公務ニ於テ死亡シ又ハ下へ(在職滿十一年以上ニ至リ)ノ十一字ヲ増補ス

一 第二十三條中其給與ノ手續ハ第二十八條ノ下へ(但書)ノ三字ヲ増補ス

本文ノ職中一トシ  
職ノ職中一トシ  
職ノ職中一トシ  
職ノ職中一トシ  
職ノ職中一トシ  
職ノ職中一トシ  
職ノ職中一トシ  
職ノ職中一トシ  
職ノ職中一トシ  
職ノ職中一トシ

一 第二十三條中(外第七項)ヲ删除ス

一 第二十三條ノ次ニ左ノ一條ヲ増補ス

第三十四條 戰鬪或ハ公務ニ因リ傷疾ヲ得第十八條第六項ヨリ輕傷ノ者ニハ退隱料ノ外一時賑恤金ヲ給ス其額ハ輕重ニ從テ定ムル左ノ如シ而シテ給與ノ手續ハ第二十八條ノ但書ニ同シ

但本條ノ者在職滿十一年以内ニシテ免職或ハ死亡シ第十七條ノ處分ニ係ル者ハ滿年賜

金ノ外ニ一時賑恤金ヲ給スルコト本文ニ同シ

第一 不治症ニシテ甲ノ職務ニ堪ヘスト雖ヒ乙ノ職ノ職務ニ堪フル者ニハ年俸全額以下拾分ノ六以上ヲ給ス

第二 不治症ニ陥ルト雖ヒ尙諸職務ニ堪フル者ニハ年俸半額以下拾分ノ壹以上ヲ給ス

一 第二十四條ヲ第三十五條ト改正ス

第二百三十六 明治十二年一月二十三日太政官書記官通達

本年(本月)第三號達海軍退隱令改正第三十四條第一項中

乙ノ職ノ職務トアルハ乙ノ職務ノ誤

第二百三十七 明治十二年七月四日達

第三十一號

使 府 縣

第二類 海軍省

三百二十九



明治八年(八月)第四百十八號達海軍退隱令第五條へ左ノ通但書追加候條此旨相達候事

第五條

但退隱料計算法ハ官俸月給ノ者ハ其退隱料年額ヲ月割ニシテ十五日前後ノ區分ヲ以テ支給ス假令ハ十五日前ニ退隱ノ者ハ其月下半額ヲ給シ十六日後ハ次月ヨリ全額ヲ給ス而シテ其退隱者十五日前死亡セシ時ハ其月ノ半額ヲ給シ十六日後ナレハ其月全額ヲ給ス  
官俸日給ノ者ハ其退隱料年額ヲ日割(三百六十五日割)ヲ以テ退隱セル次日ヨリ給シ又死亡セシ者ハ其死亡ノ日マテ給ス

文 部 省

第二百三十八 明治十二年七月一日文部省布達

第一號

今般東京府書籍館ヲ文部省ノ所轄トナシ東京圖書館ト改稱候條此旨布達候事

工 部 省

明治十三年第六  
十號公達職制  
章程ハ大政官  
末ニ列記ス  
看スヘシ

明治十三年第六  
十號公達職制  
章程ハ大政官  
末ニ列記ス  
看スヘシ

司 法 省

第二百二十九 明治十二年四月廿二日司法省達

大審院判事  
各裁判所判事  
各 檢 事

司法卿頒ツ所ノ命令規則或ハ其實際ニ適セス若クハ不便ナリト認取シ之カ修正改良ヲ要スヘキ意見アルトキハ審ニ具狀可有之此旨相達候事

第二百四十 明治十三年四月三十日司法省達

丁第七號

大 審 院  
諸 裁 判 所

本省處務時限今後毎年左ノ通相定候條此旨相達候事

- 五月一日ヨリ 午前第八時參省 午後第二時退省
- 七月十一日ヨリ 午前第八時參省 正午十二時退省
- 九月十一日ヨリ 午前第八時參省 午後第二時退省
- 十一月一日ヨリ 午前第九時參省 午後第三時退省

第二百四十一 明治十二年二月廿四日司法省達

第二類 文部省 工部省 司法省



今般内訓條例別紙ノ通り諸裁判所并各檢事へ及内達候條爲心得此旨相達候事  
省中諸局課長

別紙

大審院長  
諸裁判所長  
各檢事

今般内訓條例別紙ノ通り相定候條此旨及内達候事

明治十二年二月廿四日

司法卿大木喬任

別紙

内訓條例

第一條 凡内訓條例ハ司法卿ト各裁判所裁判官トノ間ニ於テ用ユル所ノ内規ニシテ專ラ情  
實疎通事理伸暢ノ爲ニ設クルモノナリ故ニ此條例ニ從フモノハ尋常同指令ノ効力アラザ  
ルモノトス

但同指令ハ各其職務ノ權限ニヨリ發令スルモノナリ該條例ハ職權ニ不拘唯其注意ヲ要  
スル爲ニ發スルモノナルニヨリ必シモ準據セザルベカラサルノ効力アラズトス

第二條 凡民刑上疑問疑獄且裁判百般ノ事情其注意ヲ要スル者ハ總テ此ノ條例ニ從フベシ

第三條 凡此條例ニ從テ裁判官ヨリ司法卿ニ請フモノハ末文内訓ヲ請フト書シ尋常伺文ニ

殊別スベシ

第四條 凡此條例ニ從テ司法卿ヨリ各裁判所へ致スモノハ末文内訓ニ及ト書シ尋常ノ指令  
ニ殊別ス

第五條 凡裁判所ニ於テ尋常ノ伺トシテ出スモノト雖モ司法卿於テ内訓トナスヘク見込ム  
トキハ末文内訓ニ及トナシ又内訓ヲ請フトシテ出スモ指令トナスヘシト見込ムトキハ末  
文指令ニ及トナシ還付ス必シモ原文ヲ改作セシムルヲ要セス簡便ニ從フヲ以テ旨トスレ  
バナリ

第六條 内訓ハ指令ノ効力ナシト雖モ其從フベカラザルモノハ其事理ヲ詳悉シ再ヒ之ヲ請  
ヒ反覆數回妨ケナキヲ以テ其定ムル所ヲ待ツヘシ亦事理伸暢ノ意ナリ

第二百四十二 明治十年二月十九日布告

第十九號

明治八年五月第九拾一號布告大審院諸裁判所職制章程同年同月第九拾三號布告控訴上告手續  
別冊之通改正候條此旨布告候事

但シ巡回裁判規則判事職制通則ハ刪除候事

別冊

第二類 司法省

三百三十三

控訴上告手續  
ハ訴訟法部ニ  
在リ



大審院職制

長一人

一等判事ヲ以テ之ニ充ツ

院長ハ課ヲ分チ主任ヲ命シ隨時各庭ニ臨ミ民刑事件ヲ聽理スルヲ掌ル

判事

第一 民事刑事ノ上告ヲ判理シ裁判ノ不法ナル者ヲ破毀シ及ヒ内外交渉ノ事件重大ナル

モノ並ニ判事ノ犯罪ヲ審判スルヲ掌ル

第二 死罪ノ案ヲ審閱スルヲ掌ル

屬

大審院章程

第一條 大審院ハ民事刑事ノ上告ヲ受ケ上等裁判所以下ノ審判ノ不法ナル者ヲ破毀シテ法

憲ノ統一ヲ主持スルノ所トス

第二條 審判ノ不法ナル者ヲ破毀スルノ後他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシム又便宜ニ大

審院自ラ之ヲ判決スルヲ得

第三條 已ニ他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシムルノ後其裁判所又大審院ノ旨ニ循ハサル

時ハ大審院更ニ自ラ之ヲ判決ス

附刑上ノ事  
務ハ治罪法ニ  
依リ改定ス  
第十四年第九  
十二號公達ヲ  
以テ大審院裁  
判所ノ屬ヲ廢  
シ書記ヲ置ク

第十四年第五  
十三號布告ヲ  
以テ控訴裁判  
所ヲ置キ管轄  
所安キ裁判所  
ヲ定メ民刑上  
等裁判所ノ上  
置キ管轄所ノ  
事務ハ控訴裁  
判所之ヲ處分  
シ刑上ノ罪ニ  
從フ

第四條 陸海軍裁判所ノ裁判權限ヲ越ユル者ハ其裁判ヲ破毀シテ之ヲ當然ノ裁判所ニ付ス

第五條 各判事ノ犯罪其違註紀ヲ除クノ外大審院之ヲ審判ス

第六條 内外交渉民事刑件ノ重大ナル者ヲ審判ス

第七條 各上等裁判所ヨリ送呈スル所ノ死罪案ヲ審閱シ批可シテ送還ス其否トスルモノハ

更ニ律ヲ擬シテ還付ス

上等裁判所職制

長一人

勅任判事ヲ以テ之ニ充ツ

所長ハ課ヲ分チ主任ヲ命シ隨時各庭ニ臨ミ民刑事件ヲ聽理スルヲ掌ル

判事

第一 管内ノ控訴ヲ受ケ之ヲ覆審スルヲ掌ル

第二 管内死罪ノ獄ヲ判決スルヲ掌ル

判事補

事ヲ判事ニ受ケ審判スルヲ掌ル

屬

上等裁判所章程

第二類 司法省



第十四号第五  
依三號正  
八十三號  
ヲ以テ治安  
判所始テ裁  
所ノ權限ヲ  
定

第一條 上等裁判所ハ地方裁判所ノ裁判ニ服セスシテ控訴スル者ヲ覆審ス  
第二條 各地方裁判所ヨリ具スル所ノ死罪ヲ判決シテ大審院ノ批可ヲ取り然ル後原裁判所ニ付シテ宣告セシム  
第三條 各地方裁判所ヨリ送呈スル所ノ終身懲役罪案ヲ審批ス  
地方裁判所職制

長一人

俸任判事ヲ以テ之ニ充ツ

所長ハ課ヲ分チ主任ヲ命スルコトヲ掌ル他ハ判事ニ同シ

判事

民事ヲ初審シ刑事懲役以下ヲ審判スルコトヲ掌ル

判事補

事ヲ判事ニ受ケ審判スルコトヲ掌ル

屬

地方裁判所章程

第一條 地方裁判所ハ一切ノ民事及刑事懲役以下ヲ審判ス

第二條 地方裁判所ニ於テ審判シタル民事ハ輕重トナク皆初審トス

第三條 民刑事ノ内外ニ交渉シタル者ハ其輕キハ直ニ之ヲ裁決シ其ノ重キハ一面之ヲ聽理シ一面ハ之ヲ司法卿ニ具申スヘシ  
第四條 死罪ハ審訊シテ文案證憑及ヒ擬律案ヲ具ヘ上等裁判所ニ遞送シ其行下ヲ得テ宣告ス  
第五條 終身懲役ハ擬律案ヲ具ヘテ上等裁判所ノ審批ヲ取り然ル後ニ宣告ス  
第二百四十三 明治十二年十二月十三日布告  
第四拾七號

明治十年(二月)第拾九號布告中大審院職制第一項へ左ノ通但書追加候條此旨布告候事  
院長ハ課ヲ分チ主任ヲ命シ云々  
但院長事故アルトキハ上席判事ヲ以テ代理セシムルコトヲ得

第二百四十四 明治八年十二月廿八日司法大丞添附

今般第十五號ヲ以裁判所支應假規則被相違附テハ東京裁判所ニ於テ現場取扱居候勸解手續概畧別紙之通ニ候條御心得迄送付致候此段申入候也

明治八年十二月廿八日

各府縣裁判所宛 各通

追テ別紙東京裁判所伺へ御指令是又爲御心得差添候也

別紙

第二類 司法省

十五年號達ハ九  
六號達ヲ以テ  
改正ス故ニ略  
ス

第十四号第五  
依三號正  
八十三號  
ヲ以テ治安  
判所始テ裁  
所ノ權限ヲ  
定



勸解手續概要

- 第一條 凡ソ勸解ヲ乞フ原告者ハ第一號書式ノ如キ名刺ヲ訴所ニ進達セシム
- 第二條 訴所請名刺ヲ收メ第一號書式ノ如ク番號ヲ朱書シ屬ニ出シ原告人ハ直ニ勸解席ニ至ラシム
- 第三條 屬ハ其名刺ヲ受取り第二號書式ノ如ク請取錄ニ記載シ順次判事補ニ分賦ス
- 第四條 掛リ判事補之ヲ受取り直ニ名刺ヲ携ヘ勸解席ニ蒞ニ原告人ヲシテ願意ヲ陳述セシメ直ニ召喚狀ヲ下附ス  
但シ証據アル者ハ檢閱印ヲ押ス  
一 召喚之期ハ三日ヲ不可過
- 第五條 期日至リ原被出頭ヲ届出レハ直ニ勸解席ニ至ラシメ而シテ掛リ判事補ニ申通スレハ掛リハ直ニ席ニ蒞ム
- 第六條 勸解ニ服シタル節ハ雙方連印ノ日延書或ハ願下紙面ヲ出スヘキ旨ヲ命ス
- 第七條 願下ヲ爲ス時ハ紙面檢印ノ上名刺ヲ朱抹シ屬ニ附ス屬請取錄ヲ朱抹シ編冊ニ入ル
- 第八條 若シ勸解ニ服セサル者アレハ名刺ヘ勸解不調ト朱書シ屬ニ通ス屬請取錄ニ調印スルヲ書式ノ如シ
- 第九條 若シ原被同行出頭シテ勸解ヲ乞フ者アルモ亦妨ケナシトス

第十條 勸解中財産分配ヲ以テ濟方致度旨申出ル時ハ各債主ヘ示談ノ上分配スヘキ旨原被連印ノ紙面ヲ徵シテ一件落着トス

勸解願名刺ノ書  
但シ半紙ニツ折テ用ユ

原告代人アレハ書式左ノ如シテ別ニ代言届ヲ徵スルニ及ハス

<p>第一號</p> <p>勸解 何年何號 何町何番地 身分</p> <p>何々勸解願</p> <p>原告人 姓名印</p> <p>何町何番地 身分</p> <p>年月日 被告人 姓名</p>	<p>第二號</p> <p>請取錄書式並濟口朱抹ノ式 但シ勸解不調ノ時ハ其印ヲ捺ス</p> <p>○掛印 何町何番地 何誰</p> <p>右之者ヨリ約定書變 貸金其他 勸解願出ルニ付 同道可罷出者也 東京裁判所</p>
<p>第三號</p> <p>勸解 何年何號 何町何番地 身分</p> <p>原告人 姓名印</p> <p>何町何番地 身分</p> <p>年月日 被告人 姓名</p>	<p>第四號</p> <p>○掛印 何町何番地 何誰</p> <p>右之者ヨリ約定書變 貸金其他 勸解願出ルニ付 同道可罷出者也 東京裁判所</p>



號	勸解不調	被告	姓名	號	明治年月日	第三支廳
						何町何番地
						何誰

第二百四十五 明治九年九月廿七日司法省達  
 第六十六號

地方裁判所

今般第百十四號御布告ヲ以テ地方裁判所改置候ニ付テハ左ノ通可相心得此旨相達候事  
 一各管下便宜ノ地ヲ擇ヒ區畫ヲ定メ支廳ヲ設ケ代理官ヲ置キ當分府縣裁判所章程ニ照シ事  
 務可取扱事

但其代理タルモ死罪並懲役終身ノ批可ヲ乞ヘキ者ハ都テ本廳所長ノ處分ニ屬ス其他事  
 情繁雜ナル者亦所長ノ決ヲ取ヘシ

一本廳並支廳管内ニ區畫ヲ定メ區裁判所ヲ置キ勸解等ノ事務取扱ヘキ事  
 但裁判支廳假規則ヲ改メテ區裁判所假規則トシ更ニ別冊ノ通正ヲ加ヘ候條都テ右ニ照  
 準施行スヘシ

別冊

區裁判所假規則

第一條 區裁判所ハ土地ノ便宜ニ隨ヒ其區ヲ畫シ之ヲ置クヘシ

第十四年第八  
 十三號布告ヲ  
 依リ本支廳ニ  
 依リハ改置シ  
 區裁判所ハ治  
 安裁判所ニ之  
 フ置ク

第十四年第八  
 十三號布告ヲ  
 以テ治安裁判  
 所ノ權限ヲ定

但シ本支廳所在ノ地ハ其廳内ニ於テ一庭ヲ設ケ若クハ日時ヲ分チ該廳ノ庭ヲ用ヒ區裁  
 判所ノ務ヲ行ハシムヘシ

第二條 民事ハ金額百圓ヲ以テ極ト爲ス百圓以下ハ該地方ノ便宜ニ隨ヒ其程限ヲ定ムルヲ  
 得ヘシ

但シ其土地人事等ニ係ル者モ便宜ニ隨ヒ預シメ程限ヲ定メ裁判スルヲ得ヘシ  
 第三條 刑事ハ懲役三年ヲ以テ極ト爲ス三年以下ハ地方ノ便宜ニ隨ヒ其程限ヲ定ムルヲ得  
 ヘシ其或ハ事情繁雜ナル者ハ審案ヲ具シテ本管廳ノ決ヲ取ル可シ

第四條 民事ニ於テ控訴スル者ハ明治八年第九十三號布告ニ照シ直ニ上等裁判所ニ出サシ  
 ムヘシ

第五條 違警罪ヲ除クノ外刑事ニ於テ上告スル者ハ明治八年第九十三號布告ニ照シ直チニ  
 大審院ニ出サシムヘシ

第六條 凡ソ民事ニ係ルモノハ金額ノ多少事ノ輕重ニ拘ハラヌ詞訟人ノ情願ニ任セ之ヲ勸  
 解スヘシ

第七條 勸解ヲ乞フ者ハ訴狀ヲ作ルニ及ハヌ直チニ該廳ニ願出テ其事由ヲ陳述スルヲ得セ  
 シムヘシ

第八條 勸解ハ雙方トモ必ラス本人自カラ出頭セシム可シ

圖治罪法ニ從  
 ヒ區裁判所ニ  
 於テ輕罪ヲ治  
 セス且當分遠  
 警罪モ治セス

第二類 司法省



但シ疾病事故等ニテ已テ得サル時ハ其代人トシテ親戚又ハ定マリタル雇人ヲ出サシムヘシ

第九條 凡ソ勸解ハ必シモ定規ニ拘ハラサル者トス

但シ勸解ト雖モソノ不參若クハ遲參ニ係ル者ハ裁判所成規ニ據リ處分スヘシ

第二百四十六 明治九年十月十二日司法省達

達第六十七號

地方裁判所

支廳並區裁判所稱呼ノ儀ハ總テ其地名ヲ冠シ(何裁判所何地名支廳)(何地名區裁判所)ト相稱可申此旨相達候事

第二百四十七 明治十三年八月二日司法省達

丁第拾七號

地方裁判所

司法省明治九年(九月)第六拾六號達區裁判所假規則第八條但書左ノ通改正候條此旨相達候事

第八條但書

但シ疾病事故等ニテ已テ得サル時ハ相當ノ代人ヲ出サシムヘシ代人タル者ハ一事件ヲ限リ受任スヘシ

第二百四十八 明治十三年十二月廿七日司法省達

第十四年度第五十三號布告ニ依リ支廳ノ名稱ハ消滅ス

丁第廿九號  
大審院  
諸裁判所  
各裁判所ニ逐次檢事局ヲ置候ニ就テハ裁判所備付書籍并需用品共總テ檢事局ト共通互用可致儀ト可心得此旨相達候事

第二百四十九 明治十年七月三十一日達

第五十四號

官院省使府縣

本年六月第四十六號達判事檢事年俸月俸表中ニ記載シタル何等官相當ノ文字ハ總テ取消候條此旨相達候事

第三百五十 明治十年十月三日達

官院省使府縣

本年六月第四十六號達判事檢事年俸月俸表中ニ朱書之通追加候條此旨相達候事。印ハ朱書

第七拾壹號

判事補

勅任奏任

年俸	四十五圓	四十二圓	三十五圓	三十圓	二十五圓	二十圓	十五圓	十圓	五圓	四圓	三圓	二圓	一圓	四十五圓	四十四圓	三十五圓	三十圓	二十五圓	二十圓
長	檢事	檢事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	檢事	事	事	事	事	補

任免ノ部ヲ參看スヘシ  
圖第四十六號  
公達ハ次ノ第  
七十一號公達  
ト本令トニ依  
リ消滅スルヲ  
以テ省ク







年俸 貳千四百圓ハ	年俸 三千圓	月俸 貳百圓ハ	年俸 三千圓
--------------	-----------	------------	-----------

第二百五十三 明治十三年一月廿二日司法省達

丁第二號

大 審 院

諸 裁 判 所

昨十二年十二月第五十三號及ヒ第五十六號御達ニ因リ官員現在員表用紙別紙ノ通更正候條  
本年一月ヨリ右ニ照準シ取調可差出此旨相達候事

別紙



明治 年 月 日 現 員 表

御用掛	勅	前月比較		御雇外國人	御雇	御用掛	月給	出仕	屬	月俸	前月比較		檢事	月俸	年俸	前月比較		判事	月俸	年俸
		減	増								減	増				減	増			
										七十五圓				四百五十圓	四千五百圓				三百七十圓	四百五十圓
御雇	奏									六十圓				三百五十圓	四百二十圓				三百五十圓	四百二十圓
										五十圓				三百五十圓	三百五十圓				二百五十圓	三百圓
御雇外國人	判									四十五圓				二百圓	二百四十圓				二百圓	二百四十圓
										四十圓				五百七十圓	六百七十圓				五百七十圓	六百七十圓
前月比較	等外									三十五圓				五百五十圓	八百五十圓				五百五十圓	八百五十圓
										一圓				五百圓	八百五十圓				五百圓	八百五十圓







同年七十二號  
官等ヲ改定ス  
六(第百五十五  
六)參照スヘシ

同十二年第四  
十號公達ヲ以  
テ侍補ヲ廢ス

同十三年第十  
三號公達ヲ以  
テ年俸ヲ改正ス

### 宮内省

第二百五十四 明治十年九月六日達

第六十三號

官院省使府縣

宮内省中大小丞錄出仕筆生省掌侍從長侍從番長藥劑官藥劑生被廢候事

但侍醫馭者等級及女官尙侍以下從前ノ通

同省中書記官屬侍補侍從試補醫員被置官等左ノ通被定候事

大書記官	四等	權大書記官	五等	少書記官	六等
權少書記官	七等	一等屬	八等	二等屬	九等
三等屬	十等	四等屬	十一等	五等屬	十二等
六等屬	十三等	七等屬	十四等	八等屬	十五等
九等屬	十六等	十等屬	十七等		
一等侍補	三等相當	二等侍補	四等相當	三等侍補	五等相當
侍從試補	九等相當	醫員	八等相當	ヨリ十三等相當ニ至ル	
同省中皇太后宮大夫皇太后宮亮被置官等給左ノ通被定候事					
皇太后宮太夫	三等相當	年俸三千圓			
皇太后宮亮	四等相當	年俸千八百圓			



同省中侍講侍從雜掌仕人直丁女嬬等給左ノ通被定候事

- 一等侍講 三等相當 二等侍講 四等相當 三等侍講 五等相當
- 侍從 七等相當 雜掌 十四等相當
- 仕人 等外二等 直丁 等外三等
- 女嬬 十四等 權女嬬 十五等

同省職制及事務章程別冊ノ通被改候事  
右相達候事

別冊

宮内省職制及事務章程

宮内省ハ皇室内廷皇族ニ關ル一切ノ事務ヲ管理スル所トス

職制

卿

- 第一 本省ノ諸官ヲ統率シ宮禁一切ノ事務ヲ總判スルヲ掌ル
- 第二 本省官員及宮中女官奏任以上ノ進退黜陟ヲ具狀シノノ判任以下ハ之レヲ專行ス
- 大輔 少輔
- 卿ノ職掌ヲ輔ケ卿事故アルトハ其事務ヲ代理スルヲ得

第十三章第六節  
職制  
改正シテ之ヲ以テ之ヲ改ス

第十二章第四節  
職制  
改正シテ之ヲ以テ之ヲ改ス

大書記官

權大書記官

少書記官

横少書記官

卿ノ命ヲ受ケ庶務ヲ整理シ公文受付ヲ提掌ス

屬

- 一等ヨリ十等ニ至ル
- 一等侍補 三等相當 二等侍補 四等相當 二等侍補 三等侍補 五等相當
- 常侍規諫闕失ヲ補益スルヲ掌ル
- 一等侍講 三等相當 二等侍講 四等相當 二等侍講 三等侍講 五等相當
- 講筵ニ侍シ兼テ御府ノ圖書ヲ掌ル
- 侍從 七等相當
- 常侍奉仕ヲ掌ル
- 侍從試補 九等相當
- 一等侍醫 二等相當 二等侍醫 三等相當 二等侍醫 四等相當
- 四等侍醫 五等相當 五等侍醫 六等相當 六等侍醫 七等相當
- 診候醫藥ニ奉仕スルヲ掌ル
- 醫員 八等相當ヨリ十二等相當ニ至
- 藥劑調製ヲ掌ル

第二類 宮内省



馭者

八等相當ヨリ十二等相當ニ至ル

御車調馬飼養ノ事ヲ掌ル

雜掌

十四等相當

几席灑掃宮中ノ雜役ヲ掌ル

仕人

等外二等

直丁

等外三等

皇太后后大夫

二等相等

宮事ヲ總掌ス

亮

四等相當

大夫ノ職掌ヲ輔ケ大夫事故アルキハ其事務ヲ代理スルヲ得

第二百五十五

明治十三年十二月廿八日達

第六拾七號

官省院使府縣

內務省

其省職制中左ノ通追加候條此旨相達候事

職制中卿職掌第一項

部下ノ官員ヲ統率シテノ(テ)ノ字ヲ削リ(兼テ府知事縣令ヲ監督シ)ノ十一字ヲ加フ

同第二項

專行スノ(ス)ヲ(シ)ニ作リ(兼テ地方官奏任ノ進退黜陟ニ關シ其意見ヲ上陳スルコトヲ得)ノ二十七字ヲ加フ

宮内省

其省職制左ノ通改正候條此旨相達候事

宮内省ハ皇室ノ事務ヲ管理スルノ所ニシテ式部寮ヲ置キ禮典ニ關スル事務ヲ幹理ス

職制

卿 一人

一部下ノ官員ヲ統率シテ主管百般ノ事務ヲ總理ス

一部下官員ノ進退黜陟ハ奏任以上ハ之ヲ具狀シ判任以下ハ之ヲ專行ス

一主管ノ事務ニ付法律布令ヲ設ケ又ハ其補正ヲ要スルコトアル時ハ其意見ヲ奏請スルコトヲ得

一施行ノ主任アル法案ニ付テハ元老院ノ議席ニ列シ其利害ヲ辯論スルヲ得

大輔  
卿ノ職掌ヲ輔シ

第二類 宮内省



卿事故アルトキハ其代理タルコトヲ得

少輔

掌大輔ニ亞シ

大書記官

權大書記官

少書記官

權少書記官

卿ノ命ヲ受ケ各其主務ヲ幹ス

一等屬

二等屬

三等屬

四等屬

五等屬

六等屬

七等屬

八等屬

九等屬

十等屬

各庶務ニ従事ス

一等侍講

二等侍講

三等侍講

講筵ニ侍シ兼テ御府ノ圖書ヲ管ス

一等侍醫

二等侍醫

三等侍醫

四等侍醫

五等侍醫

診候醫藥ノ事ヲ掌ル

醫員

藥劑調製ヲ掌ル

侍從長

常侍奉仕ヲ掌ル

侍從

掌長ニ亞ク

侍從試補

掌侍從ニ同シ

一等馭者

二等馭者

三等馭者

四等馭者

五等馭者

六等馭者

御車調馬飼養ノ事ヲ掌ル

雜掌

宮中ノ雜役ヲ掌ル

皇太后宮大夫

宮事ヲ總掌ス

皇太后宮亮

大夫ノ職掌ヲ亮ク

大夫專故アルトキハ其代理タルコトヲ得



皇后宮大夫

宮事ヲ總掌ス

皇后宮亮

大夫ノ職掌ヲ充ク

大夫事故アルトキハ其代理タルコトヲ得

式部頭

式部權頭(頭アレハ之ヲ置カス)

式禮祭祀一切ノ事務ヲ幹ス

式部助

式部權助

頭ノ職掌ヲ助ク

頭事故アルトキハ其代理タルコトヲ得

式部一等屬

式部二等屬

式部三等屬

式部四等屬

式部五等屬

式部六等屬

式部七等屬

式部八等屬

式部九等屬

式部十等屬

各庶務ニ從事ス

一等掌典	各禮典ニ從事ス	二等掌典	二等掌典	三等掌典	四等掌典
一級掌典補	二級掌典補	三級掌典補	四級掌典補	五級掌典補	六級掌典補
五級掌典補	六級掌典補	七級掌典補	八級掌典補	九級掌典補	十級掌典補
各禮典ニ從事ス	各禮典ニ從事ス	各禮典ニ從事ス	各禮典ニ從事ス	各禮典ニ從事ス	各禮典ニ從事ス
內掌典	權內掌典	賢所日供ニ從事ス	賢所日供ニ從事ス	賢所日供ニ從事ス	賢所日供ニ從事ス
一等伶人	二等伶人	三等伶人	四等伶人	五等伶人	六等伶人
各音樂ニ從事ス	各音樂ニ從事ス	各音樂ニ從事ス	各音樂ニ從事ス	各音樂ニ從事ス	各音樂ニ從事ス
右相達候事	右相達候事	右相達候事	右相達候事	右相達候事	右相達候事
第二百五十六	明治十年十月四日達	第二百五十六	明治十年十月四日達	第二百五十六	明治十年十月四日達
第七拾二號	官院省使府縣	第七拾二號	官院省使府縣	第七拾二號	官院省使府縣
官内省中侍醫官等左ノ通改定候條此旨相達候事	官内省中侍醫官等左ノ通改定候條此旨相達候事	官内省中侍醫官等左ノ通改定候條此旨相達候事	官内省中侍醫官等左ノ通改定候條此旨相達候事	官内省中侍醫官等左ノ通改定候條此旨相達候事	官内省中侍醫官等左ノ通改定候條此旨相達候事
一等侍醫	二等侍醫	三等侍醫	四等侍醫	五等侍醫	六等侍醫
二等相當	三等相當	四等相當	五等相當	六等相當	七等相當
第二類	官内省	第二類	官内省	第二類	官内省
三百五十五	三百五十五	三百五十五	三百五十五	三百五十五	三百五十五



四等侍醫 六等相當 五等侍醫 七等相當

第二百五十七 明治十年九月十四日達

第六拾四號

官省院使府縣

式部寮自今宮内省へ被屬同寮中判任官以下出仕等總テ相廢シ更ニ左之通被置候條此旨相達候事

一等屬	八等	二等屬	九等	三等屬	十等	四等屬	十一等
五等屬	十二等	六等屬	十三等	七等屬	十四等	八等屬	十五等
九等屬	十六等	十等屬	十七等				
大掌典	七等	權大掌典	八等	中掌典	九等	權中掌典	十等
少掌典	十一等	權少掌典	十二等	內掌典	十四等	權內掌典	十五等
大神部	十五等	中神部	十六等	少神部	十七等		
大伶人以下當分從前之通							

第二百五十八 明治十年十一月二十日達

第八十八號

官院省使府縣

十一月十三日 宮内省中任人直丁被廢更ニ左ノ通被置候事

同年百號達ヲ以テ大中小堂典神部ヲ廢シ更ニ一等堂典以下ヲ併キ同年八十三年號達ヲ以テ伶人伶員ヲ更置ス

一等仕人 等外一等 二等仕人 等外二等 三等仕人 等外三等

十一月廿六日

式部寮中伶人伶員月俸左之通被定候事

一等伶人	金二十圓	二等伶人	金十七圓	三等伶人	金十四圓
四等伶人	金十一圓	五等伶人	金八圓	一等伶員	金六圓
二等伶員	金五圓	三等伶員	金四圓	四等伶員	金三圓

右相達候事

第二百五十九 明治十年十二月廿八日達

官院省使府縣

第一百號

十二月廿日

式部寮中大中小堂典神部ノ職員ヲ廢シ更ニ左ノ職員被置候條此旨相達候事

一等掌典	四等官	月俸百圓	二等掌典	五等官	同	八拾圓
三等掌典	六等官	同 六拾圓	四等掌典	七等官	同	五拾圓
一級掌典補	八等官	月俸四拾圓	二級掌典補	九等官	同	三拾五圓
三級掌典補	十等官	同 三拾圓	四級掌典補	十一等官	同	貳拾六圓
五級掌典補	十二等官	同 貳拾二圓	六級掌典補	十三等官	同	貳拾圓

第二類 宮内省



七級掌典補 十四等官 同 拾七圓  
八級掌典補 十五等官 同 拾四圓  
九級掌典補 十六等官 同 拾貳圓  
十級掌典補 十七等官 同 拾圓

第二百六十九 明治十一年九月二日達

第三十七號

官省院使府縣

八月二十九日

式部寮中一等伶人以下被廢更ニ左ノ通被置候條此旨相達候事

一等伶人	十二等相當	月俸金二十五圓
二等伶人	十三等相當	同 二十二圓
三等伶人	十四等相當	同 十九圓
四等伶人	十五等相當	同 十六圓
五等伶人	十六等相當	同 十三圓
六等伶人	十七等相當	同 十一圓
一等伶員	等外一等相當	同 九圓
二等伶員	等外二等相當	同 七圓
三等伶員	等外三等相當	同 五圓
四等伶員	等外四等相當	同 三圓

第二百六十一 明治十一年十二月廿四日達

第五拾四號

官省院使府縣

宮内省中侍補被廢更ニ侍補并ニ侍從長被置官等職制左ノ通被定候條此旨相達候事

侍補 勅任官

侍從長 五等官

侍補 常侍規諫闕失ヲ補益スルヲ掌ル

侍從長 常侍奉任兼テ侍從ヲ監スルヲ掌ル

第二百六十二 明治十三年二月二十四日達

第拾三號

官省院使府縣

皇太后宮皇后宮大夫亮年俸本年一月一日ヨリ左ノ通改正候條此旨相達候事

大 夫 年俸三千五百圓

亮 年俸貳千四百圓

第二百六十三 明治四年八月日關(職官表抄出)

改定女官	二等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	十二等	十二等	一等外
尚侍	典侍	權典侍	掌侍	權掌侍	命婦	權命婦	女嬬	權女嬬	雜仕	

第二類 宮内省



官	等二百六	百六十	百三十	百	兩六十七	兩四十七	兩三十四	兩十七	兩十四	兩七	兩
---	------	-----	-----	---	------	------	------	-----	-----	----	---

二百六十一

第二百六十四 明治三年九月十日布告  
官並ニ華族家人職員左之通

家令 一員 家扶 八員宜ニ任ス 家從 同 家丁 同  
右之通被定候事

第二百六十五 明治六年八月二日布告

第二百七十八號 皇族家令等級左之通改定候條此旨布告候事

內親王家令 官等八等 世襲宮並一代宮家令 官等九等

第二百六十六 明治九年四月二十日達

第三十七號 皇族家扶家從家丁身分ノ儀自今左ノ官等ニ準シ取扱候條此旨相達候事  
院省使廳府縣

第二百六十七 明治十一年二月廿八日達  
家扶 官等十二等 家從 官等十五等 家丁 等外四等

第六號 官院省使府縣

府 縣

內務省中陵墓事務宮内省へ被屬候條此旨相達候事

增補

第二百六十八 明治八年十一月十日布達

第二百六十九

埼玉縣管轄武藏國足立郡舍人町自今東京府管轄被 仰付候條此旨布告候事

增補

第七拾八號 明治九年五月廿五日布告

宮城縣管下陸前國氣仙郡青森縣管下陸奥國二戸郡自今岩手縣管轄被 仰付候條此旨布告候事

第二百七十 明治十一年一月十一日布告

第壹號 靜岡縣管下伊豆國八丈島始七島自今東京府管轄被 仰付候條此旨布告候事

第二百七十一 明治十二年四月四日達

第十四號 琉球藩ヲ廢シ沖繩縣ヲ被置候條此旨布告候事

第二類 府縣

三百六十一



但縣廳ハ首里ニ被置候事

第二百七十二 明治十三年六月二十一日布告

第三拾貳號

先般沖繩縣廳ヲ首里ニ被置候旨布告候處更ニ那覇ニ改定候條此旨布告候事

第二百七十三 明治十三年三月二日布告

第六號

今般德島縣ヲ置キ阿波一國ヲ管轄セシメ候條此旨布告候事

第二百七十四 明治十三年十月八日布告

第四拾四號

內務省所轄小笠原島ヲ東京府管轄ニ被屬候條此旨布告候事

第二百七十五 明治十三年十月廿八日東京府布達

第四百三拾四號

小笠原島へ當府出張所ヲ設ケ該島一切ノ事務ヲ爲取扱且警察事務ノ義ハ警部巡查ヲ置カス  
出張所吏員ヲシテ爲取扱候條此旨布達候事

第二百七十六 明治十一年七月廿二日布告

第十七號

同年内務省  
第八十號  
處分心得ハ  
第二百八十  
四ニ掲載ス

郡區町村編制法左ノ通被定候條此旨布告候事

第一條 地方ヲ書シテ府縣ノ下郡區町村トス

第二條 郡町村ノ區域名稱ハ總テ舊ニ依ル

第三條 郡ノ區域廣潤ニ過キ施政ニ不便ナル者ハ一郡ヲ書シテ數郡トナス 東西南北上中下  
某郡ト云カ如シ

第四條 三府五港其他人民稠濶ノ地ハ別ニ一區トナシ其廣潤ナル者ハ區分シテ數區トナス

第五條 每郡ニ郡長各一員ヲ置キ每區ニ區長各一員ヲ置ク郡ノ狭少ナルモノハ數郡ニ一員

ヲ置クコトヲ得

第六條 每町村ニ戶長各一員ヲ置ク又數町村ニ一員ヲ置クコトヲ得

但區内ノ町村ハ區長ヲ以テ戶長ノ事務ヲ兼ヌルコトヲ得

第二百七十七 明治十三年四月八日布告

第拾四號

明治十一年(七月)第拾七號布告郡區町村編制法左ノ通追加候條此旨布告候事

第七條 此編制法ヲ施行シ難キ島嶼ハ其制ヲ異ニスルコトヲ得

第八條 地方ノ便益若クハ人民ノ請願ニ由リ止マコトヲ得サル理由アルモノハ郡區町村ノ區域

名稱ヲ變更スルコトヲ得

第九條 第三條第四條第七條第八條ノ施行ヲ要スルトキハ府知事縣令ヨリ內務卿ニ具狀シ